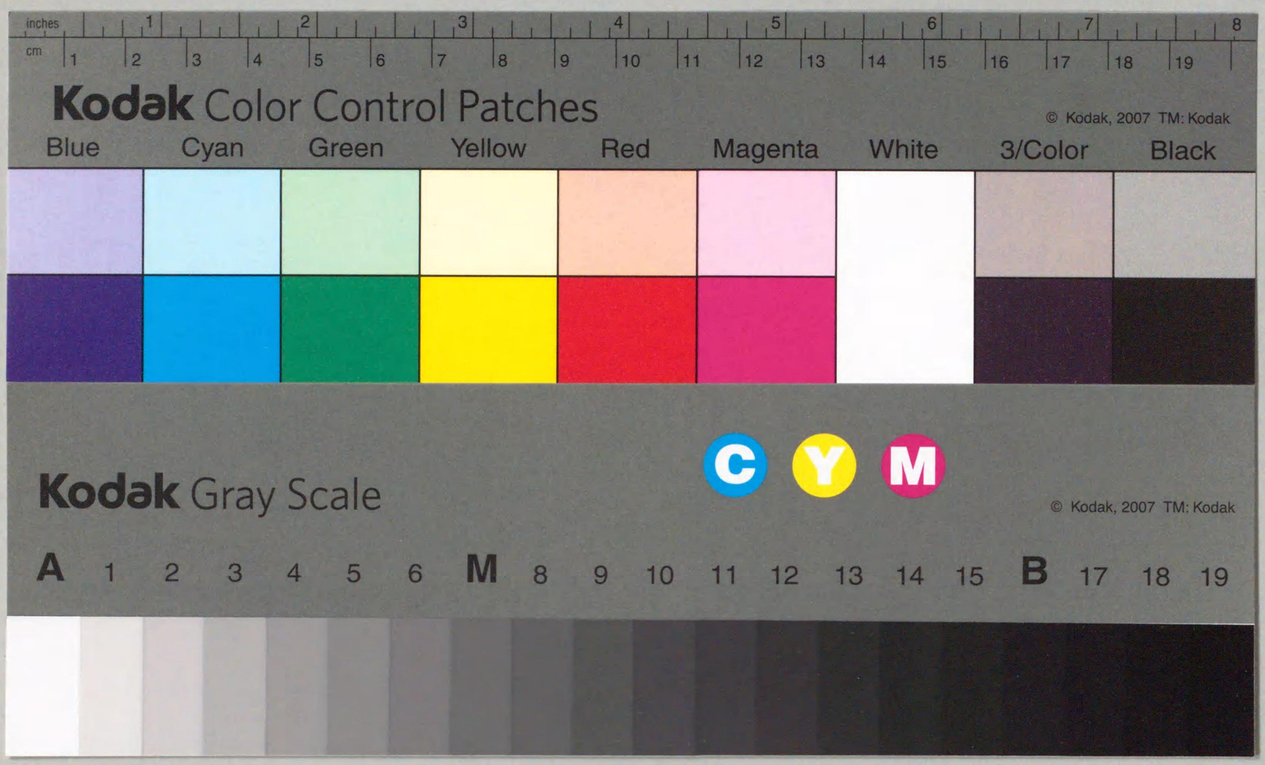


586.57
N685n
00272625

一般資料

ISSEIDO
東京 一成 神田

日本毛織二十年史

日本毛織株式會社

民物

俵原隼生

一 孫 俵 臣大工商

586.57 N685n

国立国会
27.7.11
図書館

272625

序

我が社創立以來、今年を以て正に三十四年に達しぬ。人生三十年決して長き歳月と謂ふべからざるも、此の間、我が羊毛工業發達の徑路を顧みれば、實に幾多の波瀾變遷を重ねたり。卽ち日清日露兩戰役前後の財界波動に由る影響を始め、歐洲大戰後の大反動、關東震災の被害、昭和二年の大恐慌等擧げ來れば何れも斯業界の苦難ならざるはなし。しかも此の間我が同業者は幾度かの淘汰に遭ひ、三十年無傷のまゝに繼續し來れるもの殆ど稀なり。我が社もまた此の間幾多の苦難に遭遇したれども、幸に一難ある毎に一倍の生長を遂げ、基礎は愈〻鞏固に、實力また年と共に增進するに至れり。小篇日本毛織三十年史は卽ちこれが業績を記錄し、記念せんがための出版なり。

惟ふに、我が羊毛工業は、これを綿絲紡績業に比すれば未だ發達の過程にあれども、時代文化の趨勢に觀れば將來極めて重要なる國家の產業たるべきなり

我が社の使命や重しと謂はざるべからず。而も將來斯業の改善擴張すべきもの多々あり、最善の努力を以て最良の解決を與へんことを期す。今に於て既往の三十年を顧みれば、其の進歩の跡異常なるものありと雖も、更に將來の三十年に想到すれば、其の變化や一層大なるものあらん。蓋し帝國々運の發展は窮りなく、時代文化の趨勢進んで已まざるべければなり。

こゝに、日本毛織會社三十年史を出版するに當り、聊か所懐を述べて序とな す。

昭和五年十一月

日本毛織株式會社々長

本書の編纂に就て

本書はもと本社創立三十年の記念事業として出版する計畫の下に、昭和三年五月編纂に着手したものである。初めの計畫では、本社の徑路と地位を對照するために、可成詳細に我が羊毛工業界の推移變遷を織り込む積りであつた。そこで、先づ斯界の全般に亙りて史料の蒐集を試みた。ところが、斯界の古い記錄や文獻は極めて尠く、殊に、中央の諸官廳や東京の各毛織會社のものは、往年の大震災で多く喪失してゐたので、これには尠からず弱らされた。

かうした資料窘鑿に意外の日子を費した後、本社の書庫をあさる事となつたが、これも歐洲大戰以前の記錄は大部分散逸して、據るべきものが極めて乏しいので、專ら古い社員の記憶を辿つたり、また長い取引先の意見を叩いて基礎資料を纏め、之に累年の新聞雜誌記事や統計表を獵つて考證を索めることとした。そして、此の間更に圖表や、統計表の製作に時日を費し遂に同年を準備事業のために暮して了つた。

斯くて、愈々本文を起稿したのが翌昭和四年の二月である。それから五月の末には原稿が纏つたので、重役の檢閲を經ることとなつた。其の結果、再調を要するものや訂正すべき箇所を正し、殊に省約すべき點があつたので、全部稿を改めて稿文の約三分の一を削除することとなつた

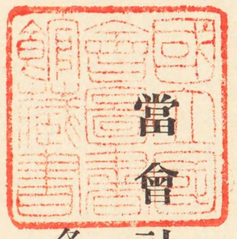
そして、之に其の後の徑路を增補し、愈々全篇脫稿を告げたのは、翌昭和五年の秋まだ淺き九月の半ばであつた。

本書沿革編には可成考證資料を添載する筈であつたが、上述の理由で總て之を省略することとした。編纂期の遲延した事情と共に、此の點は切に大方の諒恕を乞ふ。

本書資料の蒐集に當りて、社內社外の關係諸氏が、此の事業のために後援を吝まず、調査に照會に、多大の便宜を與へられたことは、編者の感謝する所である。また本書の刊行に際して、斯界の先輩深澤甲子男氏が、特に監修の任に當られたことは、編者の意を强うする所であつて、裝幀に編輯に勞を費されたことは甚大であつた。こゝに深く謝意を表するものである。

昭和五年十一月

小谷竹三郎



當會社の榮譽

各博覽會共進會出品誌

光榮

明治三十五年春　明治天皇舞子巡幸の砌縣下の製產品を天覽に供す。當社製白毛布外八點も其の光榮に浴す。

明治三十六年春神戸港に於て大觀艦式御擧行の砌舞子行在所より特に米田侍從を勅使として當社加古川工場に御差遣あらせられ具さに作業狀況を視察せしめらる。

明治三十六年七月第五回內國勸業博覽會に出品せし當社製品數點皇室御買上の榮を賜はる。

明治四十年五月第九回關西府縣聯合生產品共進會に出陳せし當會社の茶褐絨は　有栖川宮殿下の御買上を賜はる。

明治四十一年十一月神戸港に於て大觀艦式御擧行の砌　明治天皇舞子行在

所に於て縣下の重要製産品を天覽に供す、當社製品も其の光榮に浴し陸軍茶褐霜降絨及び白毛布の二種御買上の榮を賜はる。

明治四十二年四月　東宮殿下舞子行啓の砌陸軍茶褐霜降絨、朱子目外套地袴絨、夏服セル地、白毛布及び模様入毛布の六種御買上の榮を賜はる。

明治四十三年十一月岡山縣下に於て陸軍大演習の砌　明治天皇行在所に於て各製産物を天覽に供す、當時供進の當社製茶褐霜降絨、朱子目絨、袴絨及び白毛布の四種御買上の榮を賜はる。

明治四十四年五月貿易製産品共進會に　東宮殿下行啓の砌當社製縞メルトン御買上の榮を賜はる。

大正六年六月　閑院宮載仁親王殿下姫路工場に御臺臨あらせらる。

大正七年十一月　伏見宮博恭王殿下加古川工場に御臺臨、場內を御視察あらせらる。

大正十年五月　皇后陛下九州行啓の御途次須磨離宮に御滯在の砌當社製白毛メリヤス御肌衣、白毛メリヤスペティーコートの二種奉獻せしところ御嘉納あらせられ更に淡紅色毛メリヤス御肌衣、同ペティーコートの二種御買上の榮を賜はる。

大正十年九月　李王世子殿下各務ヶ原航空隊御見學の爲御來岐の砌岐阜工場御視察の榮に浴す。

昭和三年十月京都に於て御大典擧行の砌當社は兵庫縣知事を經てカシミヤクツシヨン、白毛メリヤスシヤツ、ズボン下の二種を奉獻せしところ御嘉納あらせらる。

昭和四年六月　天皇陛下關西巡幸の砌兵庫縣廳に於て縣下の重要製産品を天覽に供す。當社製品も其の光榮に浴し白毛メリヤスシヤツ、ヅボン下、合服地の二種御買上の榮を賜はる。尙當時當社は纐纈花氈、製品見本帖を奉獻

博覽會受賞

第三回織物展覽會

一等金牌

明治三十三年四月開會せる大日本織物協會主催の本會に於て當會社の製品は上記の金牌を受領す

神戸市製產物品評會

一等褒賞

明治三十三年四月神戸市開催の本會に於て當會社の製品は上記褒賞を受く。

第七回關西各府縣聯合生產品共進會

二等賞銀牌

明治三十五年四月農商務省の主催の本會に於て當會社の製品は上記賞牌を授けらる。

第五回內國勸業博覽會

名譽銀牌

明治三十六年陽春四月東京市に開會せる農商務省主催の本博覽會に於て當社の出品は審査の結果

せしところ御嘉納あらせらる。

昭和五年六月　天皇陛下關西行幸の砌加古川工場に待從御差遣の光榮に浴し且つ兵庫縣廳に於て當社謹製品も天覽の榮を賜はり、加古川工場謹製の霜降スコツチ及び純毛メリヤス御肌衣御買上げの恩命を賜はる。

上記名譽章を授與せらる。

第四回全國製產品博覽會

一等進步牌

明治三十八年四月京都市に開會せる本博覽會に於て當會社の出陳せる製品は審査の上技術の進歩著しとなし上記賞牌を授與せらる。

第九回關西各府縣聯合生產品共進會

一等金牌

明治四十年四月農商務省主催の本會に於て當會社の製品は審査の結果上記金牌を授けらる。

東京勸業博覽會

記念名譽銀牌

明治四十年五月東京府主催の本會に於て當會社の製品は優良と認められ、記念名譽銀牌を授與せらる。

第十回各府縣聯合生產品共進會

一等賞金牌

明治四十三年五月農商務省主催の本會に於て當會社の製品は最も優良と認められ上記金牌を受領す。

貿易製產品共進會

名譽大賞

明治四十四年四月神戸商業會議所主催の本會に於て當會社の出品は上記名譽大賞を授けらる。

中國六縣製產品共進會

名譽大賞

明治四十五年四月姫路市主催の本會にて當社の製品は最高の名譽大賞を受領す。

帝國製產品共進會

一等賞金牌

大正三年秋大正天皇御卽位記念として、姫路市に開ける本會に於て當會社の製品は上記の金牌を受領す。

第二回貿易製產品共進會

名譽大賞

大正三年五月神戸市主催の本會に於て當會社は場内特設館を設け數十點の出品をなしたるが觀衆の好評嘖々製品は例により、最高の名譽大賞を受領す。

第一回發明品博覽會

二等賞銀牌

大正三年五月大阪市に開會せる本會に於て當會社の防縮加工品は上記賞牌を受く。

桑港萬國大博覽會

名譽賞

大正四年米國サンフランシスコ市開會の萬國大博覽會に於て當會社の製品は上記名譽金牌を受領す。

臺灣勸業博覽會

一等金牌

大正五年臺灣鐵道開通記念として臺中に開催せる本博覽會に於て當會社の製品は上記の榮譽を獲得す。

畜産工藝博覽會

名譽金牌

大正八年五月東京市上野公園に開催の本會に於て當會社は場内特設館を設け衆目を惹きたるが出品物は審査の結果上記最高の金牌を受領す。

中國四國各縣聯合製産品共進會

名譽金牌

大正十年春姫路市に開會せる本會に於て當會社は場内特設館を設けて好評を博したるが出品物は審査の結果上記最高の大賞を受領す。

東京勸業博覽會

名譽大賞牌

大正十一年新緑五月東京府は世界大戰の平和克復を記念するため空前の大規模になる博覽會を上野公園に開催し全國の耳目を聳動せしむ、當會社は同業會社と聯合し金五萬圓を投じて壯麗なる羊毛工業館を場内に特設し觀衆の好評を博せり。當會社の出品物は本館主要の部分を占め最も衆目に映じたるが審査の結果最高の榮譽に値するものとなし頭記の賞牌を授與せらる。

國産品愛用巡回博覽會

名譽賞牌

大正十三年秋開催の本展覽會に於て當社の出品は巡回各地の好評を博し同會より記念狀を受く。

第二回畜産工藝博覽會

名譽賞牌

大正十四年五月東京市上野に開會せる本會に於て當會社は金一萬五千圓を費して壯麗なる特設出品館を設け場内に異彩を放ちたるが出品は審査の結果上記の賞牌を授與せらる。

大大阪記念博覽會

感謝狀

大正十四年春大阪毎日新聞主催の本博覽會に於て當社は場内特設館を設け衆目を惹きたるが主催者より感謝狀を受く。

大連勸業博覽會

一等賞大金牌

大正十四年九月大連市に催せる本會に於て當會社の出品は上記の最高賞牌を受く。

こども博覽會

褒狀

大正十五年東京及大阪に於て開催せられたる本會に於て當社の出品は一般の好評を博し主催者大阪毎日新聞により上記の褒狀を受く。

第二回化學工藝博覽會

大名譽賞牌

大正十五年三月東京市上野公園に開ける本會に於て當社の製品は上記の最高賞牌を授けらる。

全國産業博覽會

名譽大賞（毛織物）

名譽大賞（陳列意匠）

大正十五年四月姫路市主催の全國産業博覽會に於て當社は壯麗なる意匠陳列場を設け衆目の焦點となりたるが同會は審査の結果上記各賞を授與せらる。

産業文化博覽會

感謝狀

大正十五年九月より東京に開會せる本會に於て當社の製品は主催者中外商業新報社より感謝狀を送らる。

汽車巡回博覽會

感謝狀

大正十五年秋開催せる本會に於て當社の出品は主催者より感謝狀を受く。

國産愛用巡回博覽會

感謝狀

大正十五年秋擧行の本會に於て當社の出品は參考品として賞讃を博し主催者より感謝狀を受く。

兵庫縣織物博覽會

感謝狀

大正十五年十一月開催の本會に於て當社の出品は主催者より感謝狀を受く。

新竹州共進會

褒狀

昭和元年十二月臺灣新竹に於て開會せる本會に於て當社の出品は褒狀を受く。

京都國産振興博覽會

一等賞金牌

朝日賞

昭和二年五月京都市に於て開會せる本會に出陳せる當社の製品は審査の結果本會及大阪朝日新聞社より上記の賞牌及賞狀を受く。

東亞勸業博覽會

優良國産金牌

昭和二年五月福岡市に開會せる本會に於て當社の製品は輸入對抗優良國産品たるの鑑査狀に添へ上記最高の賞牌を授與せらる。

國産振興染織工業博覽會

優良國産品證

昭和二年十月名古屋市に開催せる本會に於て當社の製品は優良國産品證を授與せらる。

大禮記念國産振興博覽會

優良國産賞牌

時事賞牌

昭和三年春東京商工會議所の主催により上野公園に開會せる本會は前回の平和博にも劣らざる大規模の博覽會なりき、此の時も亦當會社は同業會社と聯合し金三萬五千圓を投じて羊毛工業館を場内に特設し觀者の賞讃を博せり、當社の出品は殆ど館内の半ばを占めたるが審査の結果本會及時事新報社より上記最高賞牌を授けらる。

大日本勸業博覽會

名譽大賞牌

昭和三年三月より岡山市の主催により同市に開催せる本會に於て當社の製品は頭書の最高賞牌を授けらる。

中外産業博覽會

優良國産褒狀

昭和三年四月より別府市の主催により同市に開ける本會に於て當社の製品は上記の褒狀を送らる

第二回婦人子供博覽會

感謝狀

昭和三年三月より大阪市天王寺公園に開催せる本會に於て當社製品は主催者大阪毎日新聞社より感謝狀を送らる。

兵庫縣物産博覽會

記念褒狀

昭和三年四月姫路市に開會せる本會に於て當社の製品は優良品として記念褒狀を受く。

大典奉祝名古屋博覽會

名譽大賞牌（毛織物）

功勞賞（陳列意匠）

昭和三年九月名古屋市の主催により同市鶴舞公園に開催せる本會に於て當會社は金一萬圓を投じて場内に特に陳列場を設け衆目を惹きたるが審査の結果上記各賞牌を授與せられたり。

大禮記念京都博覽會

名譽大賞牌（毛織物）

銀牌（陳列意匠）

昭和三年秋京都市の主催により岡崎公園に開會せる本會に於て當會社は一萬五千圓を費して特に陳列場を設置し衆目を集めたるが陳列館及出品物に對し同會より上記最高賞を授與せらる。

昭和産業博覽會

功勞賞

昭和四年三月より廣島市の主催により同市に開會せる本會に於て當會社の陳列場及出品は上記最高賞牌を授與せらる。

大禮記念昭和勸業博覽會

名譽賞牌

昭和四年三月京都市に開催の本會に於て當社の製品及陳列意匠は上記の賞牌を授けらる。

朝鮮博覽會

名譽大賞牌

昭和四年九月より朝鮮京城に開會せる本會に於て當社より金一萬五千圓を費して場内に特に陳列場を設け觀衆の賞讃を博したるが出品物及陳列意匠に對し上記の最高賞牌を授けらる。

行幸記念發明品展覽會

感謝狀

昭和四年五月神戸市に催せる本會に於て當社の出品に對し感謝狀を受く。

日本毛織三十年史　目次

第一編　沿革……一
第一章　緒言……三
第二章　創業時代……一一
　第一節　設立の由來……一一
　第二節　創業期の苦難……一三
　第三節　技術員を歐洲に派遣……一九
第三章　日露戰後の發展時代……二四
　第一節　製絨事業の發展……二六
　第二節　梳毛事業の創設……二六
　第三節　日本毛糸紡績會社の設立……二九
　第四節　毛織合同運動と當社……三三
第四章　歐洲大戰時の好況時代……三六
　第一節　露國軍用絨の引受……四一
　第二節　モスリン、毛絲の好況……四七
　第三節　原料、機械の輸入難……四四

第四節　日本毛糸紡績會社合併……四七
第五節　未曾有の好成績……五一
第五章　歐洲大戰後の新發展……五六
第一節　戰後の反動と當社……五七
第二節　關東大震災とモスリン滯貨問題……六一
第三節　毛絲事業進出と昭和毛絲紡績の設立……六五
第四節　人絹及び毛メリヤス事業を開始……六九
第五節　毛織合同談の再燃と當社……七三
第二編　事業と組織……八一
第一章　營業機關……八二
第一節　神戸本店……八三
第二節　東京支店……八七
第三節　大阪出張所……九〇
第四節　天津出張所……九二
第五節　製品……九二
第六節　取引先……九七
第二章　工場……一〇四

第一節　加古川工場……一〇五
第二節　印南工場……一一三
第三節　姫路工場……一一八
第四節　岐阜工場……一二三
第五節　明石工場……一二五
第六節　名古屋工場……一二七
第七節　人絹工場……一三三
第三章　業務組織……一三三
第一節　重役と株主……一三三
第二節　職制と分課……一四〇
第四章　福利施設と工手團體……一五七
第一節　福利施設……一五七
第二節　工手團體……一六三
第五章　傍系會社……一七六
第一節　昭和毛絲紡績株式會社……一七六
第二節　共立モスリン株式會社……一八二
第三節　日本モスリン株式會社……一九〇

第三編　日本毛織株式會社外史……一九五
第一章　明治以前……一九七
第一節　古代の毛織物……一九七
第二節　幕末輸入の毛貨物……一九九
第二章　明治初期……二〇一
第一節　官設製絨所の創設……二〇一
第二節　民間羊毛工業の萠芽……二〇四
第三節　毛織物需給の徑路……二〇六
第四節　濠洲羊毛輸入の端緒……二〇九
第三章　日清戰後……二一一
第一節　製絨事業の發展……二一一
第二節　モスリン事業の勃興……二一四
第三節　毛織小機業發展の動機……二一七
第四章　日露戰後……二一八
第一節　製絨事業の發展……二一八
第二節　モスリン事業の發展……二二〇
第三節　トップ事業と捺染加工……二二四
第五章　歐洲大戰時代……二二七
第一節　製絨事業の好轉……二二七
第二節　モスリン事業の活躍……二二九
第三節　羊毛事業熱の勃興……二三四
第六章　歐洲大戰後……二三八
第一節　財界の反動と關東震災……二三八
第二節　有力毛織會社の破綻頻出……二四一
第三節　名古屋地方の毛織小機業……二四五
第七章　日本羊毛工業會……二五〇
第一節　日本羊毛工業會の沿革……二五〇
第二節　毛織物關稅改正運動……二七〇
第四編　日本毛織株式會社年譜……二八一
日本毛織株式會社年譜……二八三
第五編　日本毛織株式會社事業に關する諸章程……三〇三
日本毛織株式會社定款沿革……三〇五
日本毛織株式會社就業規則……三一七

目　次

尙正會會則……三三五
敬愛會會則……三四八
モスリン振興會規約……三五四
大阪毛斯綸同盟會規約……三五五
專屬仲立人に關スル細則……三五九

附錄　諸統計……卷末・一―四一

口繪寫眞

一　獻上品寫眞
一　博覽會出品寫眞
一　本社各工場全景
一　本社現重役と元重役

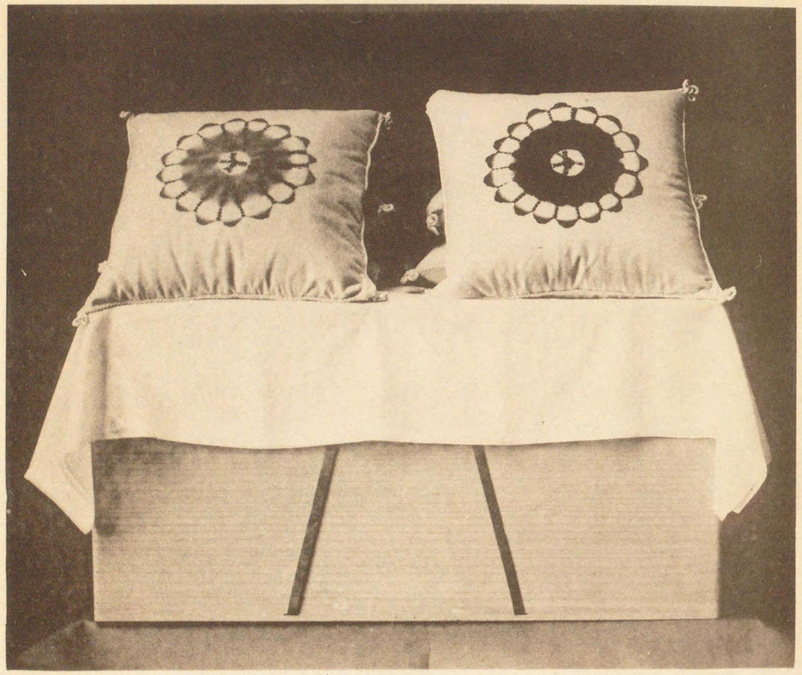
口繪圖表

一　一九二四年度主要羊毛消費國
一　ラシヤ、セル、ネル、生產並に輸入對照圖
一　ラシヤ、セル、ネル、毛布累年生產輸出入對照圖
一　昭和三年全國毛織物產額地方別圖表
一　累年羊毛輸入高と本社消費高對照圖

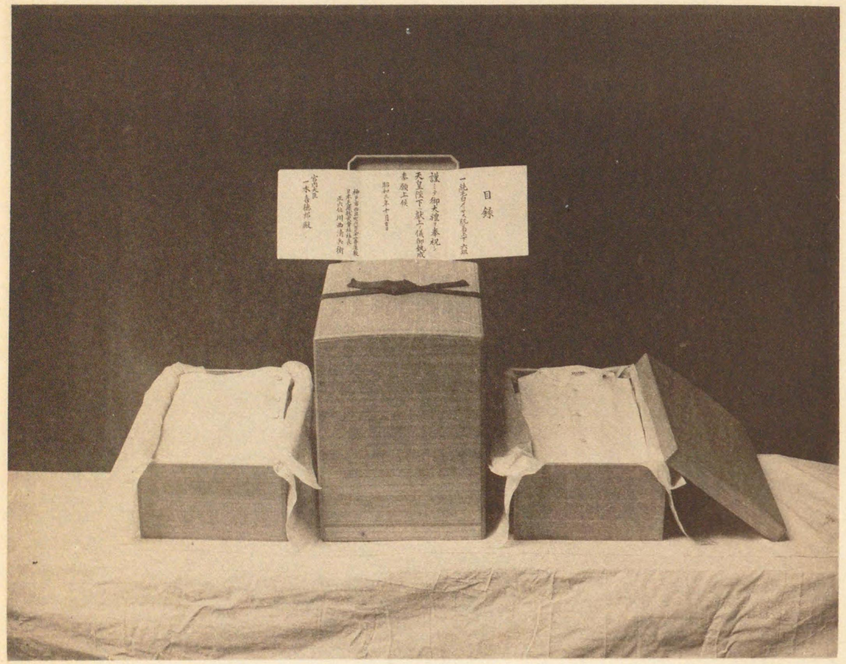
一　モスリン累年生產高並に累年輸出入高對照圖
一　全國累年毛絲、トツプ生產輸入及本社生產對照圖
一　本社製品累年生產價額增減圖
一　本社製品內地、滿、鮮、灣販賣領域圖
一　本社累年利益率增減圖
一　本社各工場歷年並に社員工手增減圖
一　本社累年資本金及積立金社債增減圖

挿入寫眞

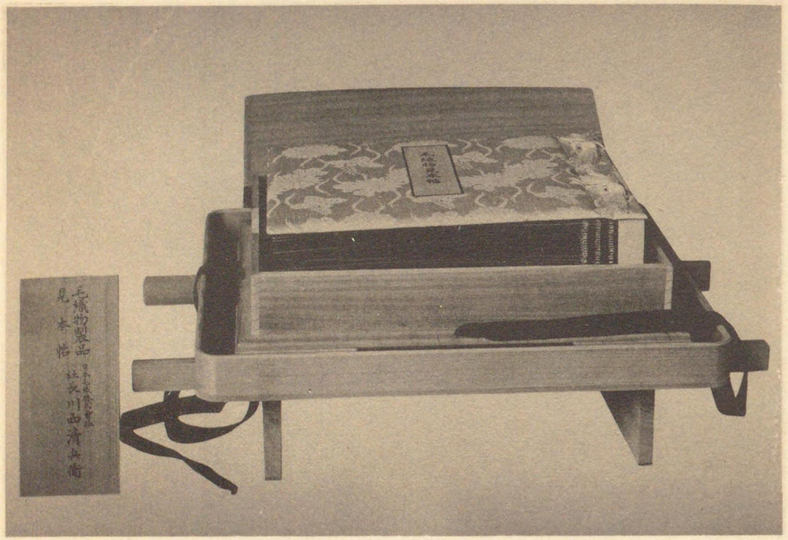
一　本社及び支店出張所
一　本店支店出張所社員
一　加古川、印南、姬路、明石、岐阜、名古屋各工場
一　各工場社員
一　本社元社員
一　昭和毛絲紡績株式會社工場及び社員
一　共立モスリン株式會社工場及び社員
一　日本モスリン株式會社工場及び社員



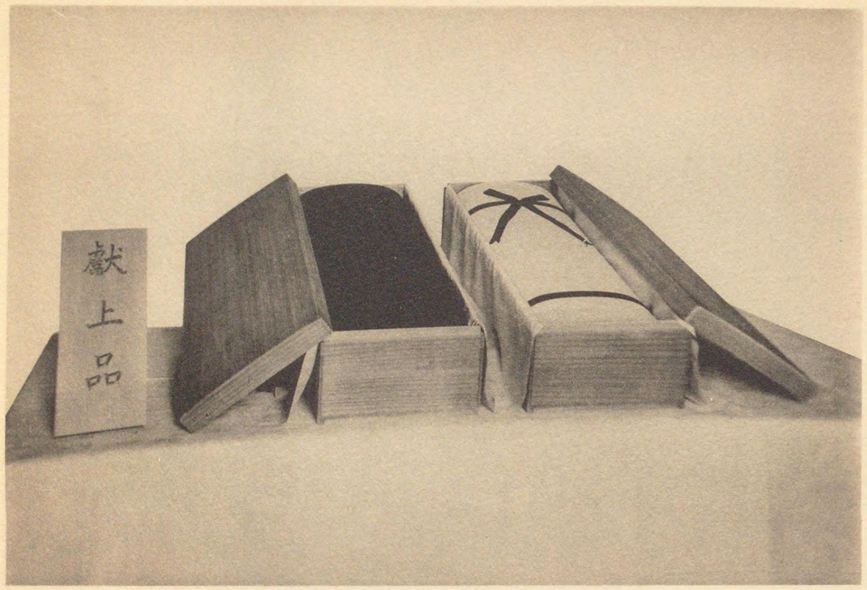
昭和三年十月御大禮を奉祝し
皇室に獻上御嘉納あらせられ
た本社謹製の「クツション」



昭和三年十月御大禮
上獻に當り皇室に獻
御嘉納あらせられた
る白毛メリヤス肌著

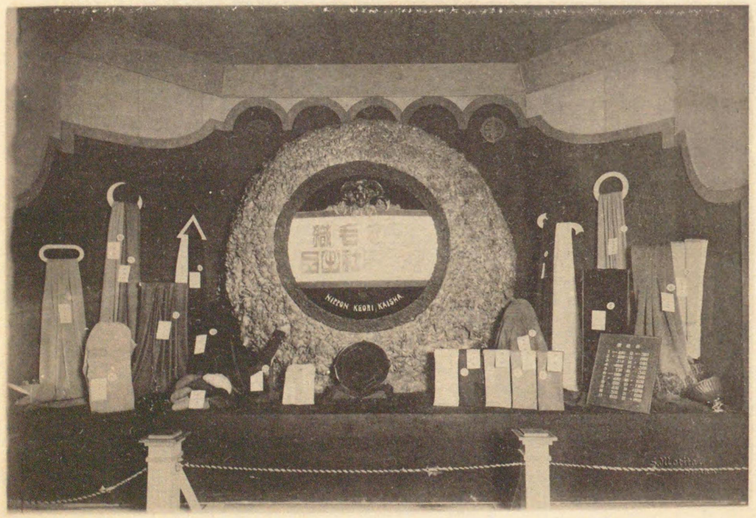


昭和四年五月　聖上陛下神戸行幸に際し献
上御嘉納あらせられたる毛織物製品見本帖

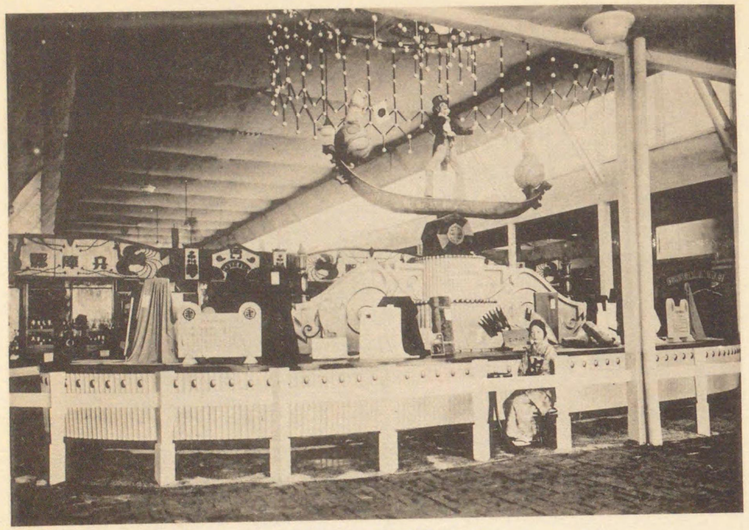


昭和四年五月　聖上陛下神戸行幸に際し
獻上御嘉納あらせられたる本社謹製の絨

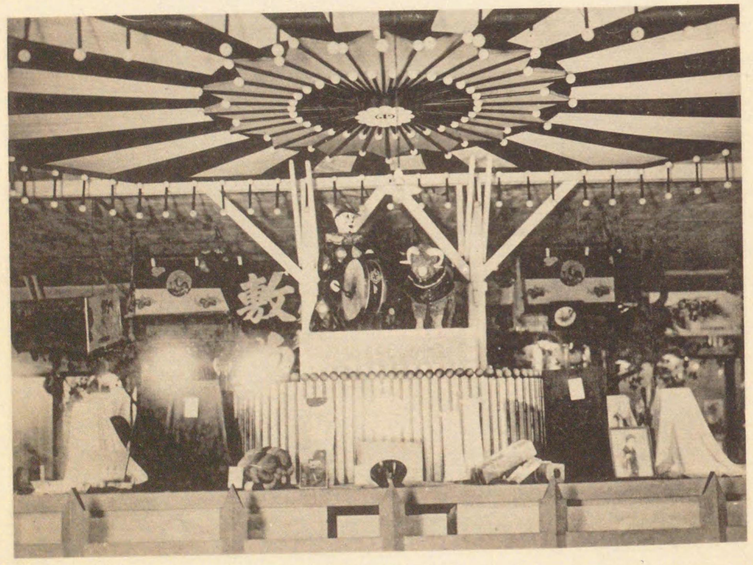
大正十五年七月東京産業文化博覽會出品



大正十四年四月大大阪記念博覽會出品

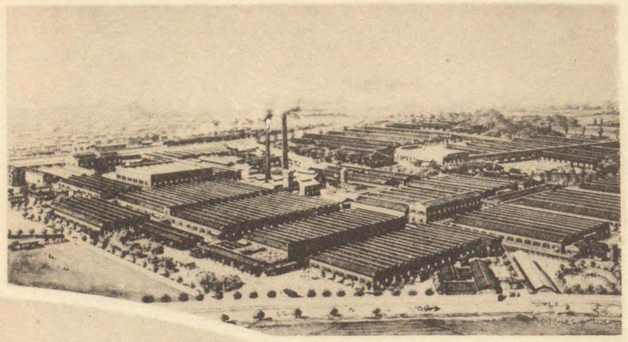


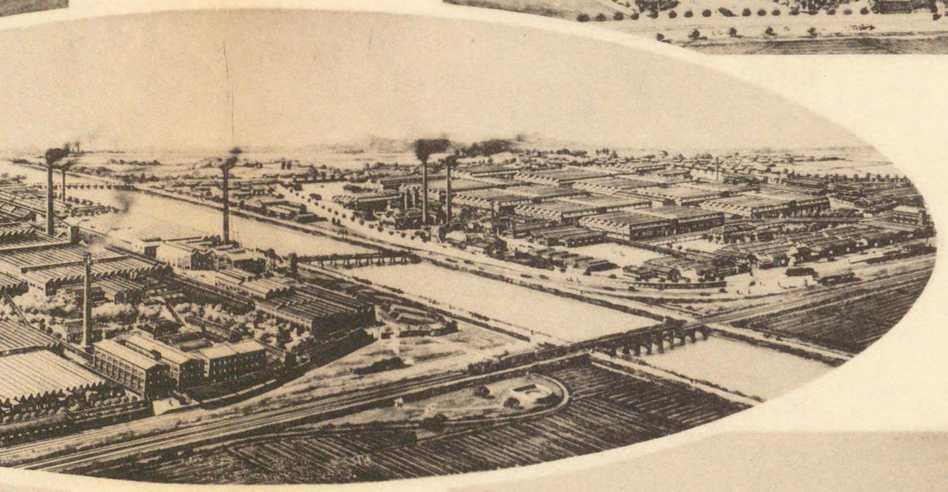
昭和三年九月大礼記念京都大博覧會出品



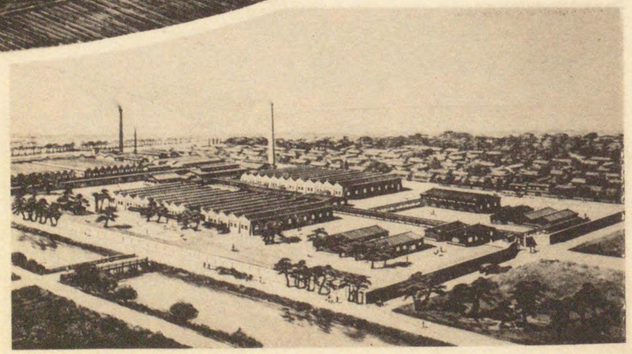
昭和三年十月神戸博覧會出品

景全場工各社本

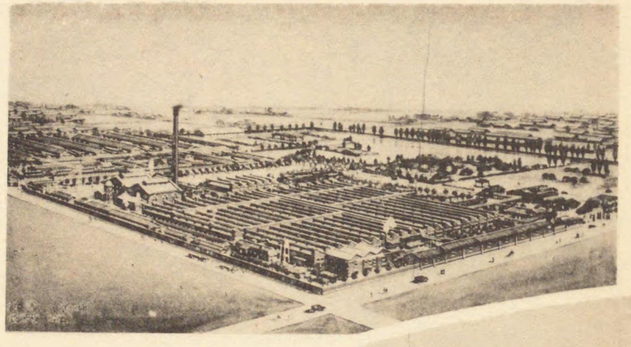


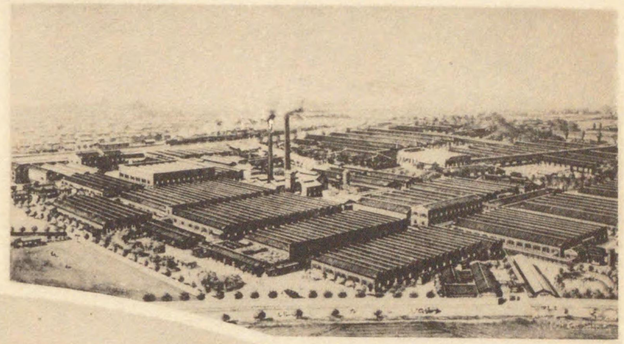


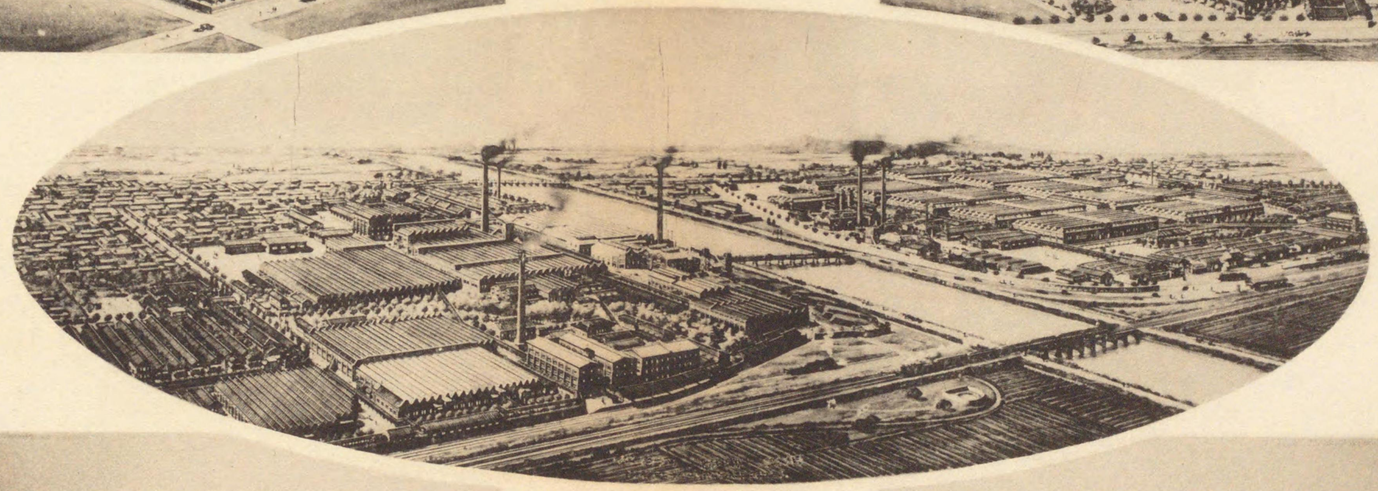
創立　明治二十二年
資本金　五千萬圓
積立金　二千萬圓
從業員　一萬五千人
工場敷地　四十萬坪
製產額　八千萬圓

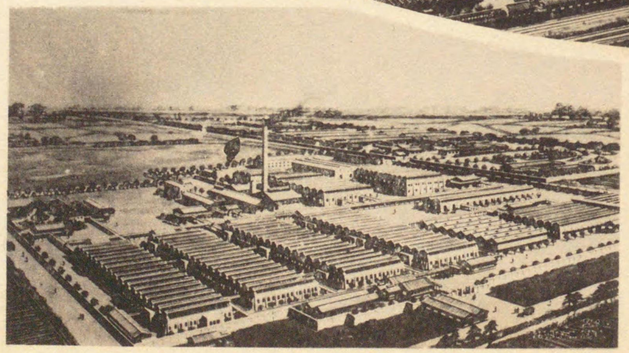


景全場工各社本

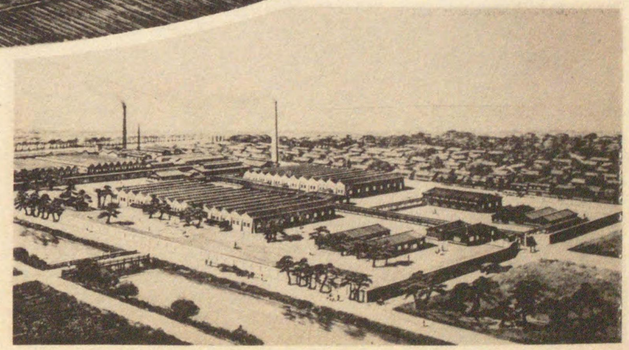


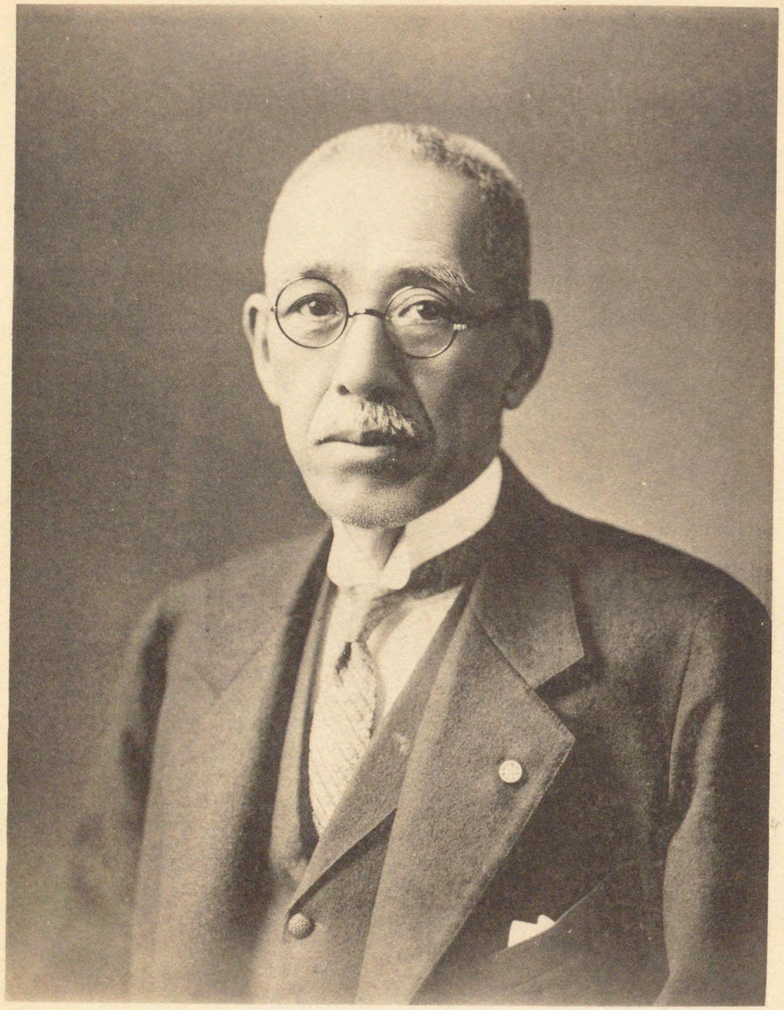






創立　明治二十二年
資本金　五千萬圓
積立金　二千萬圓
從業員　一萬五千人
工場敷地　四十萬坪
製產年額　八千萬圓





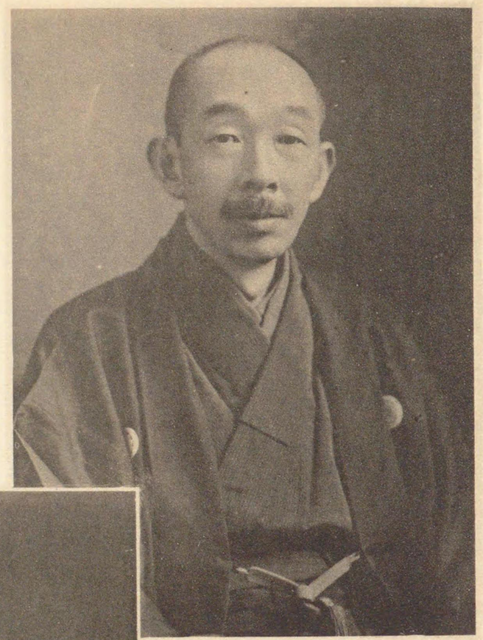
取締役社長　川西清兵衛氏

相談役　小曾根喜一郎氏

常務取締役
塚脇敬二郎氏

取締役 谷江長氏

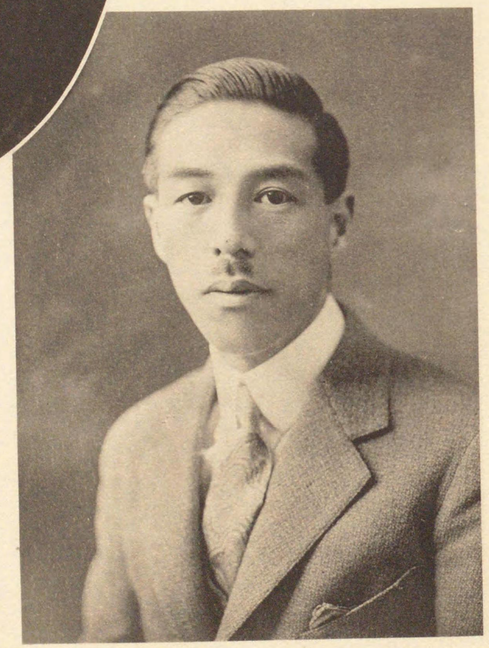
取締役
松方幸次郎氏



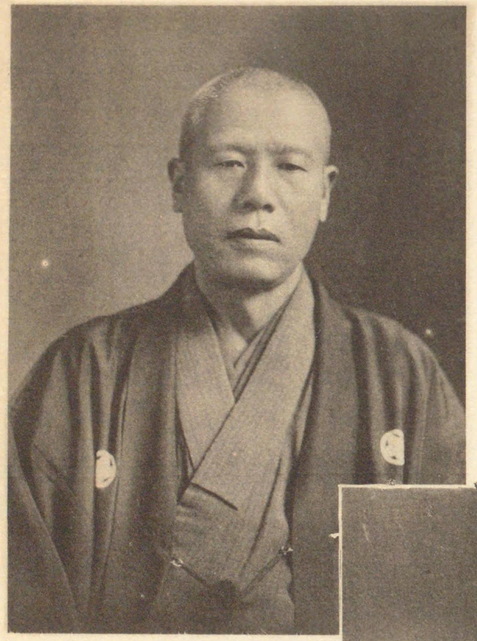
取締役　田村市郎氏

取締役　小倉喜一氏

取締役
小曾根貞松氏

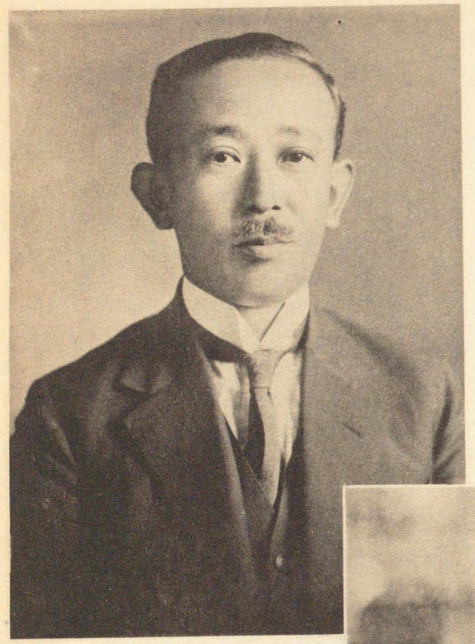


取締役 川西清司氏

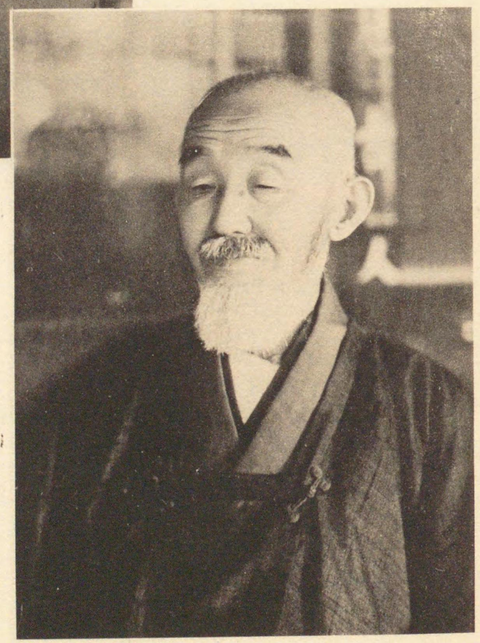


監査役　松本鐵次郎氏

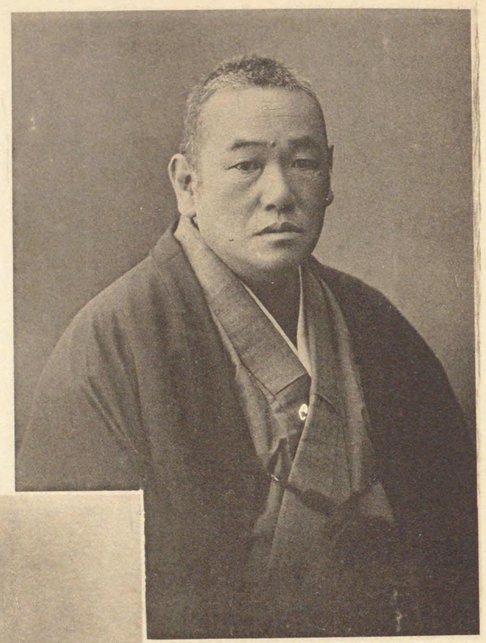
監査役　毛戸勝元氏



監査役　佐野鼎三郎氏



元相談役　有馬市太郎氏



元取締役　柏木庄兵衞氏

元取締役　米光源之介氏

元取締役　安藤行敬氏

元取締役　松本善七氏

元取締役
澤田清兵衛氏

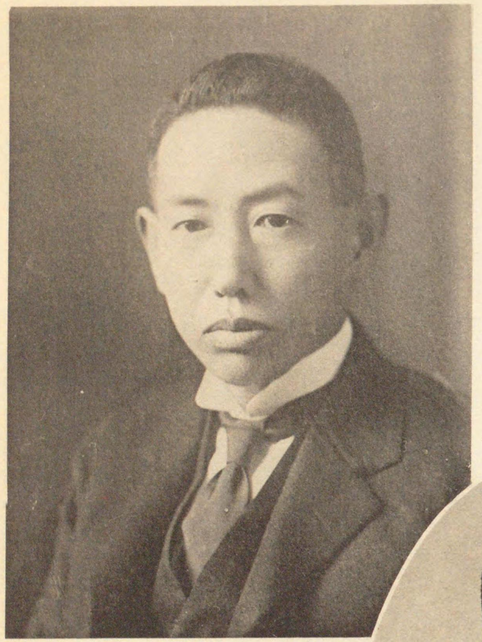
元取締役　瀧川龍三氏

元取締役
敷根吉造氏

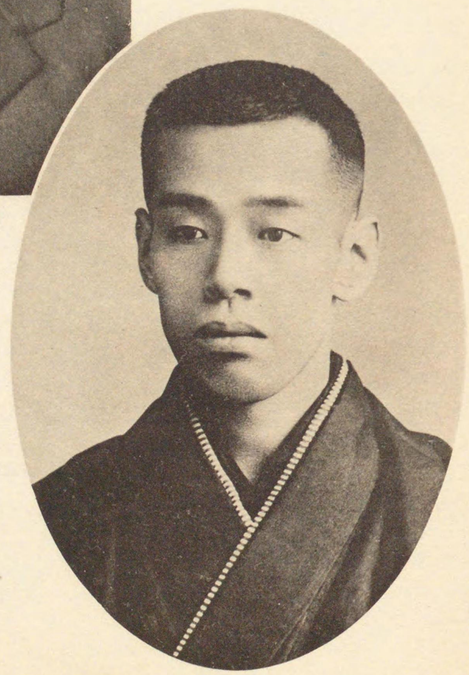
元監査役　池田貫兵衛氏

元監査役
石井源兵衛氏

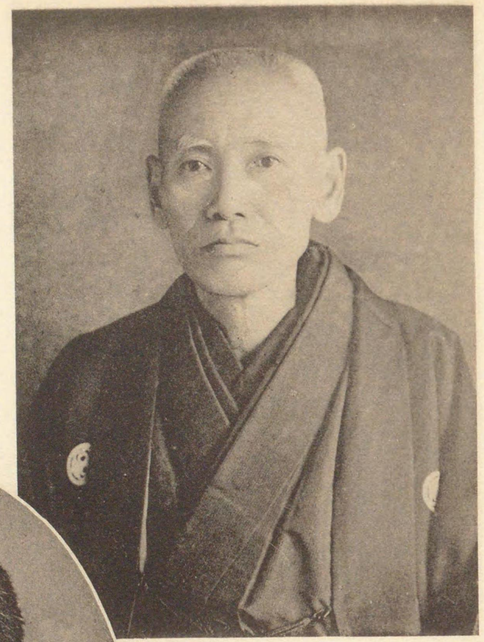
元監査役
木谷吉次郎氏



元監査役　石川茂兵衞氏

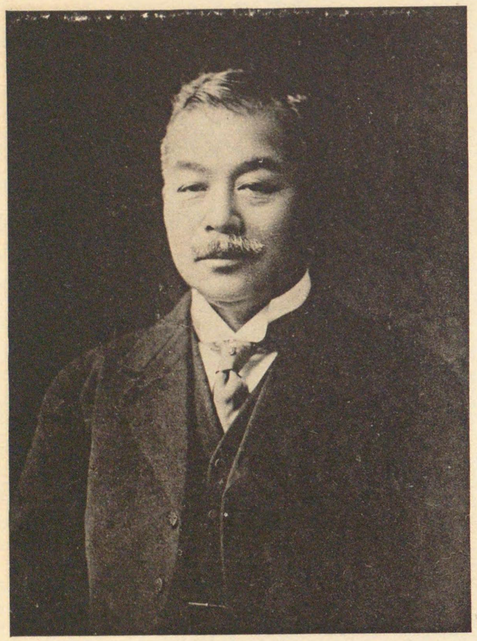


元監査役
柏木庄兵衞氏



元監查役　秋山忠直氏

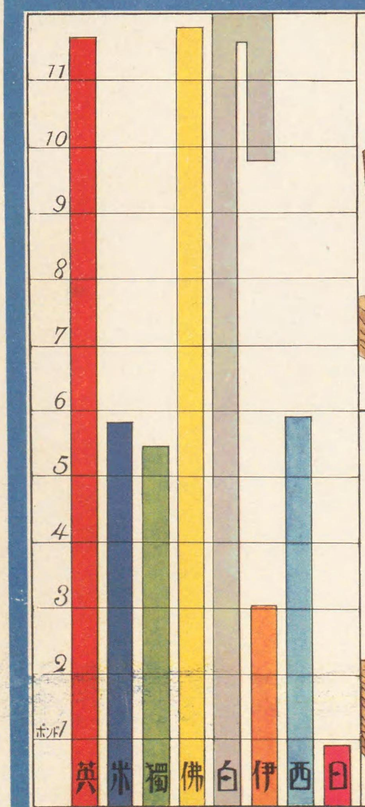
元監查役
顯川君平氏



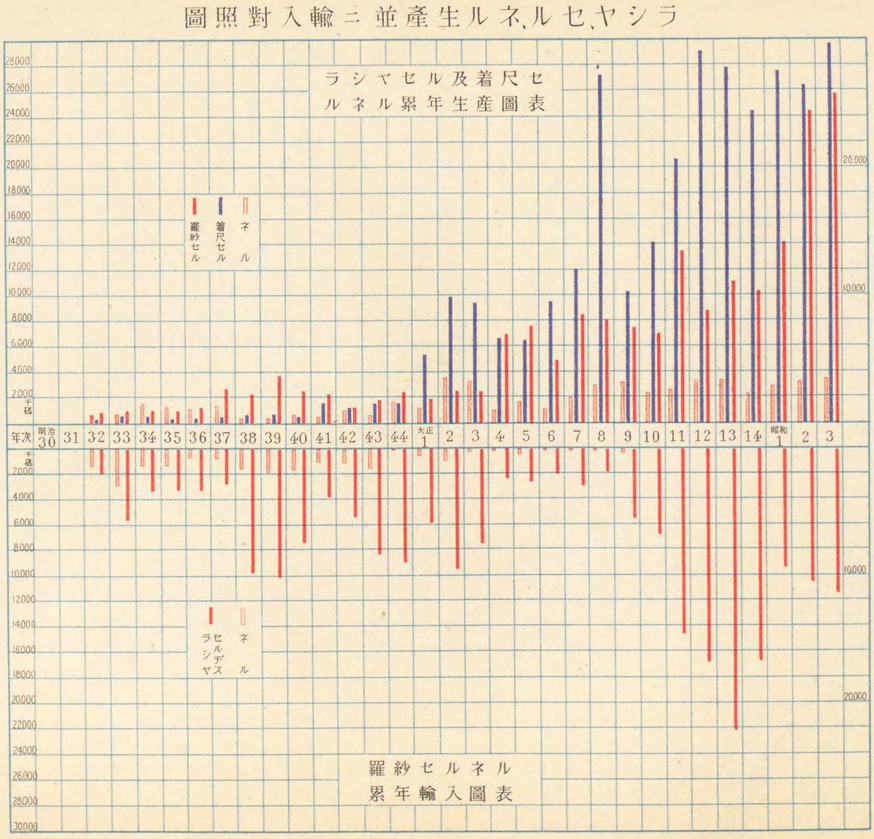
元監査役
門川棄三郎氏

1924年度 主要羊毛消費國

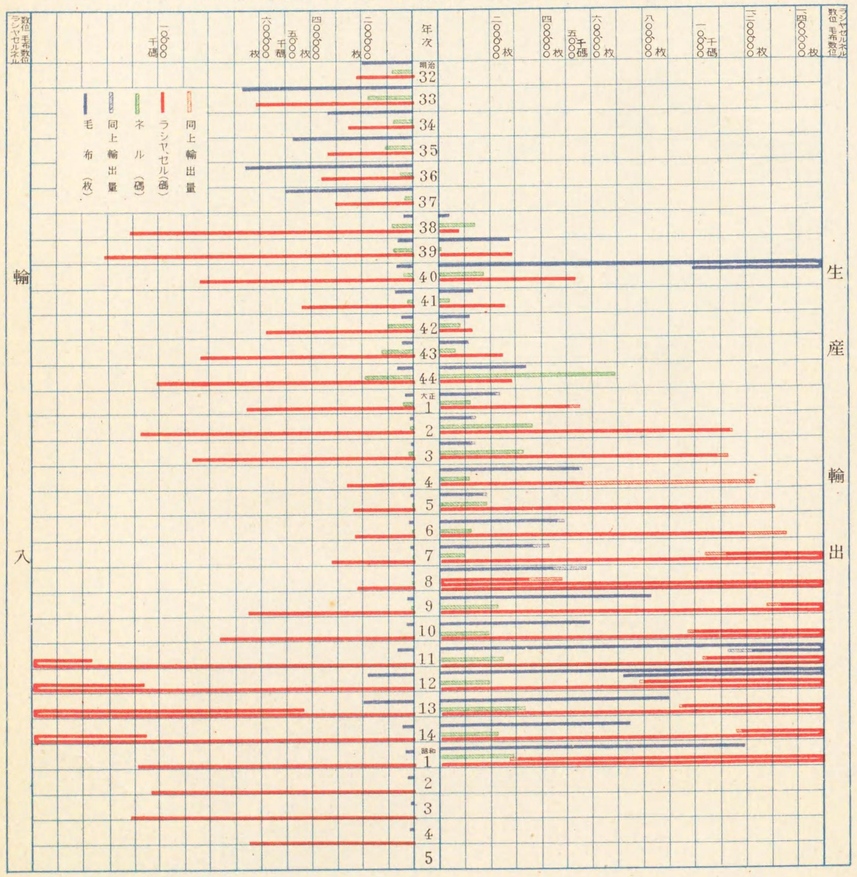
本国人口一人当消費量



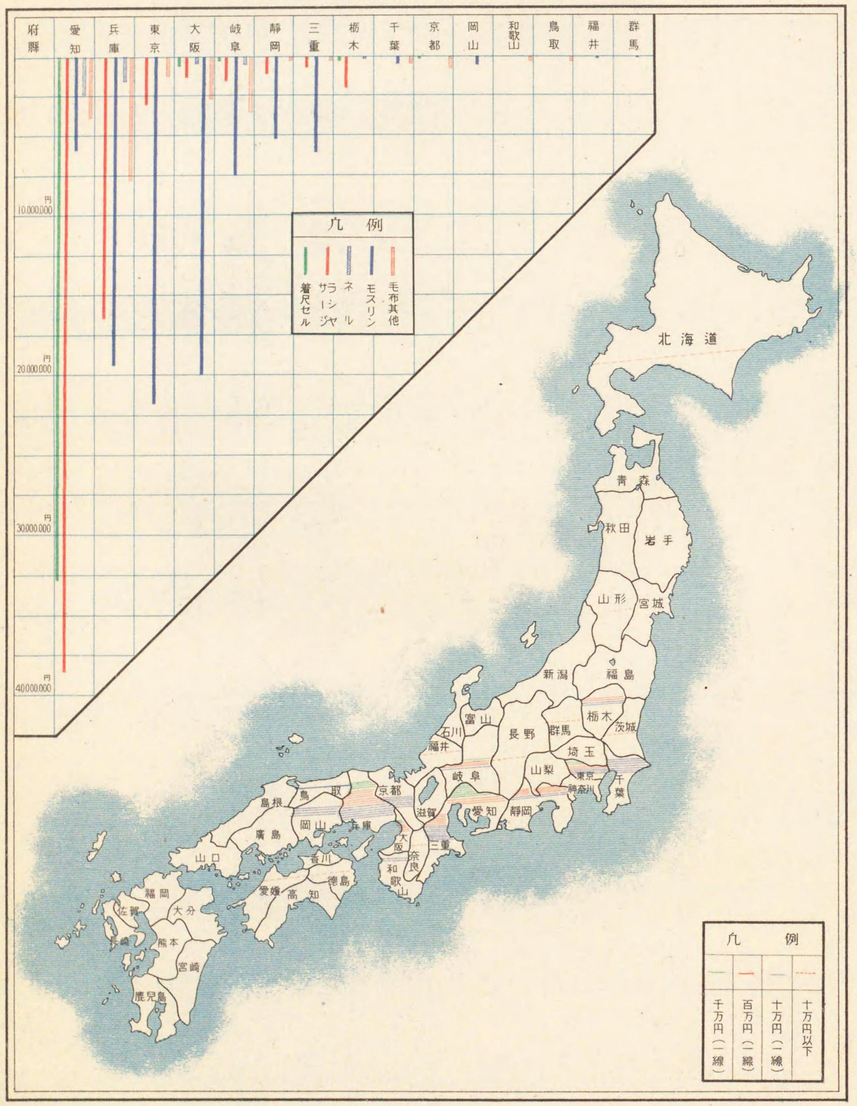
ラシヤセルネル生産並ニ輸入對照圖



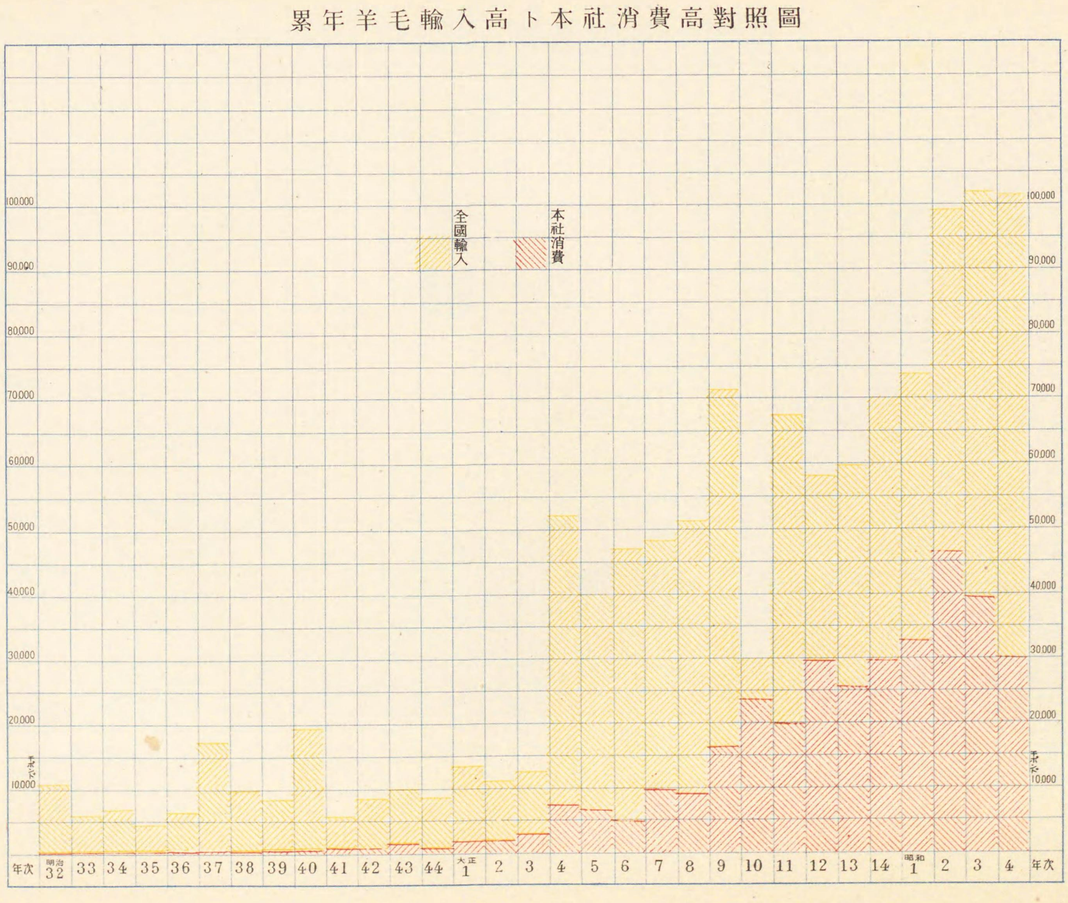
ラシヤ.セル.ネル.毛布累年生産輸出入對照圖



昭和三年全國毛織物産額地方別圖表

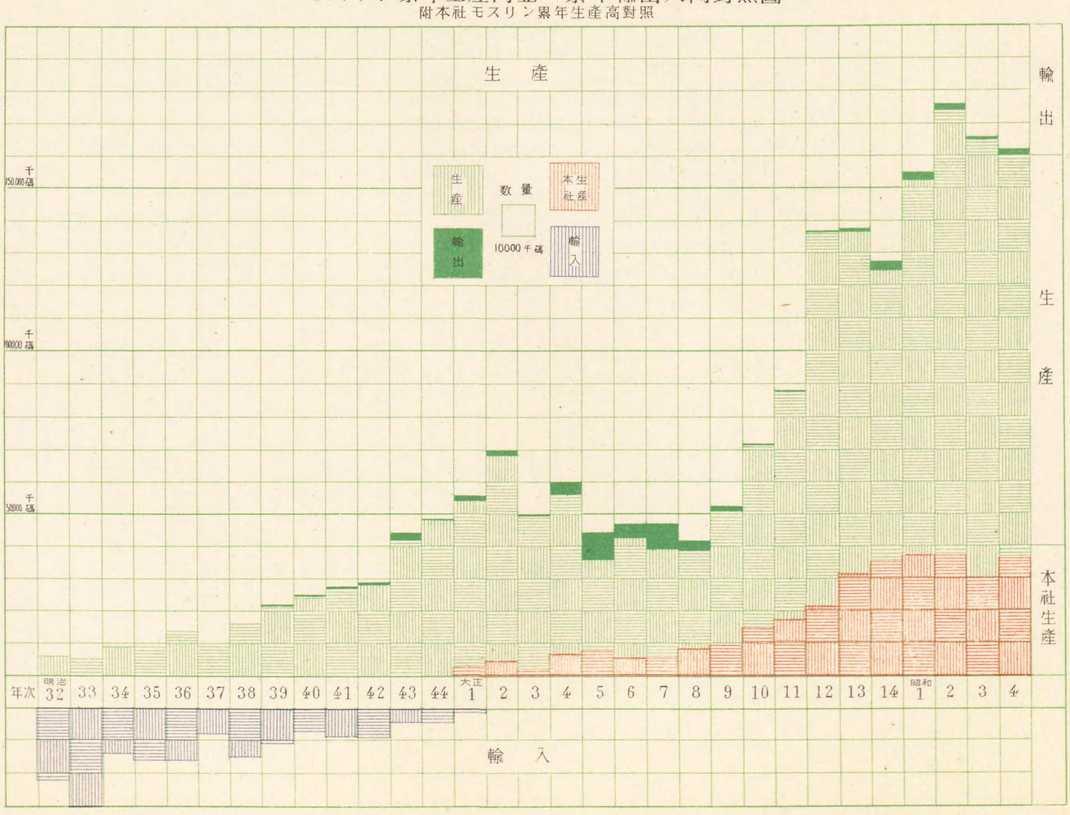


累年羊毛輸入高ト本社消費高對照圖

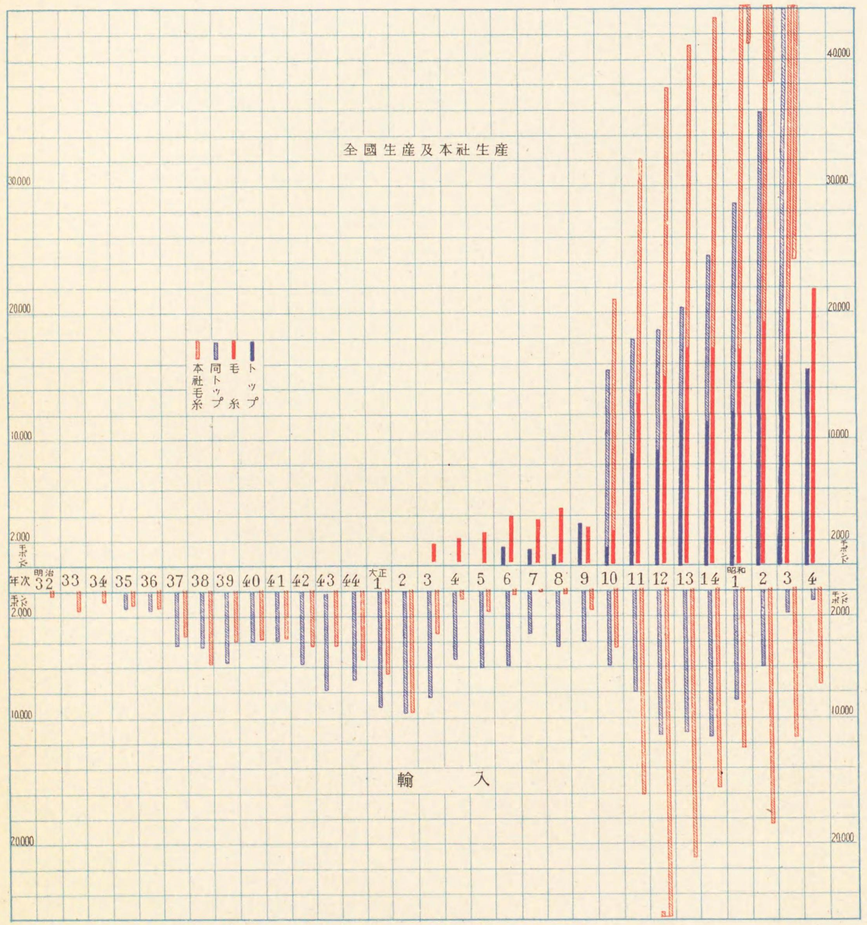


モスリン累年生産高並ニ累年輸出入高對照圖

附本社モスリン累年生産高對照

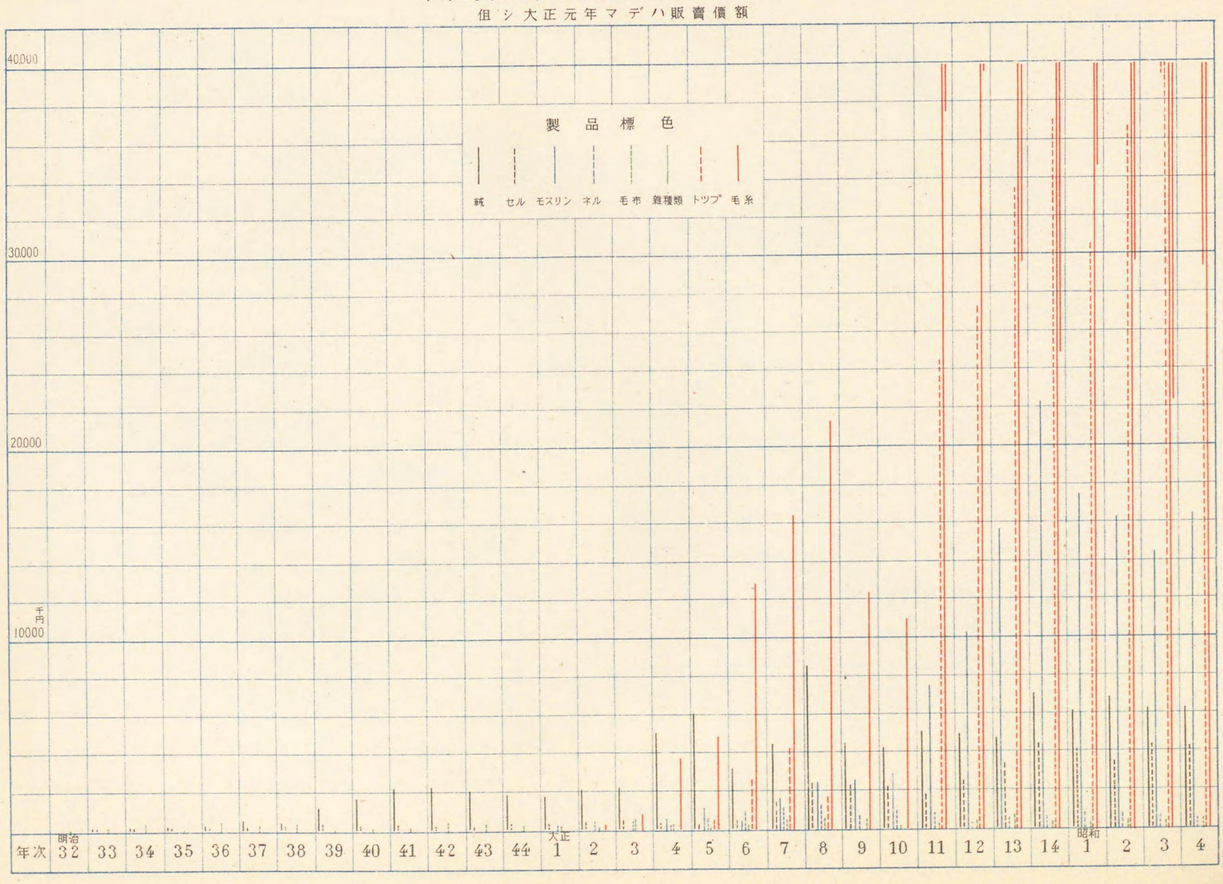


全國累年毛糸トップ生産輸入及本社生産對照圖

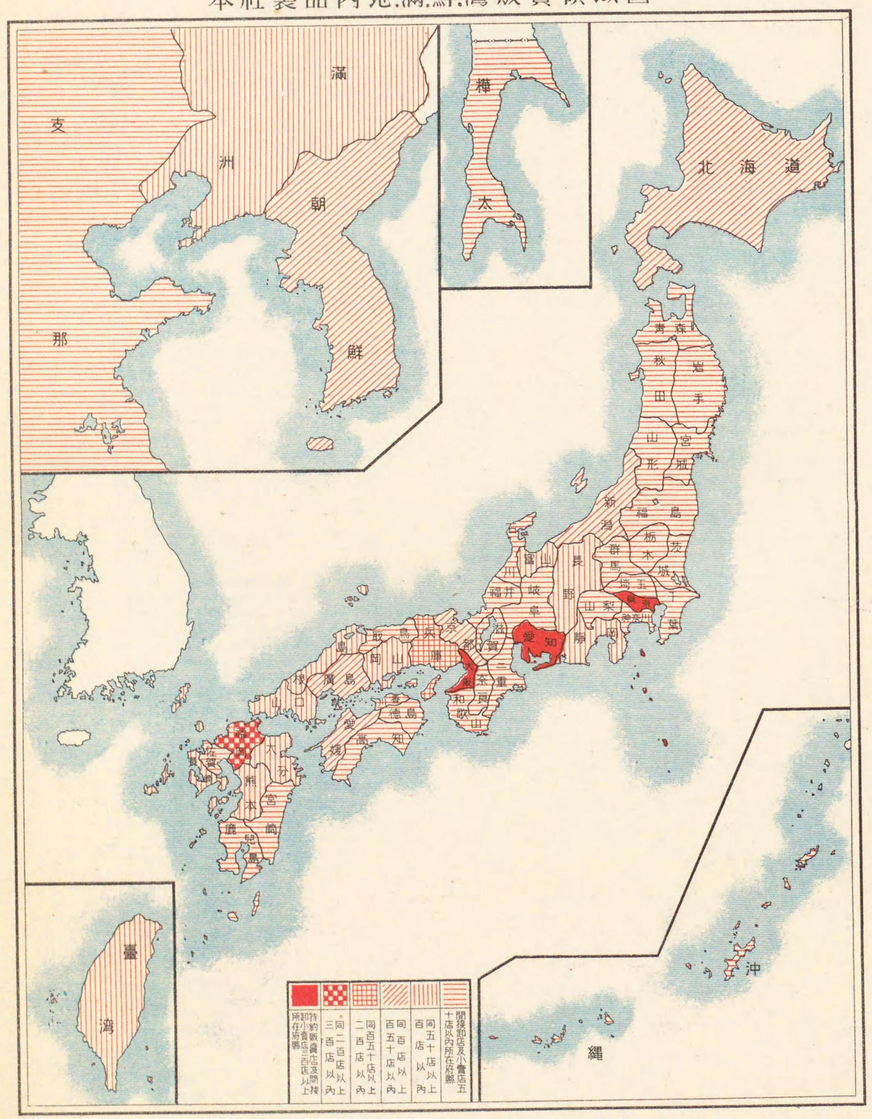


本社製品累年生産價額增減圖

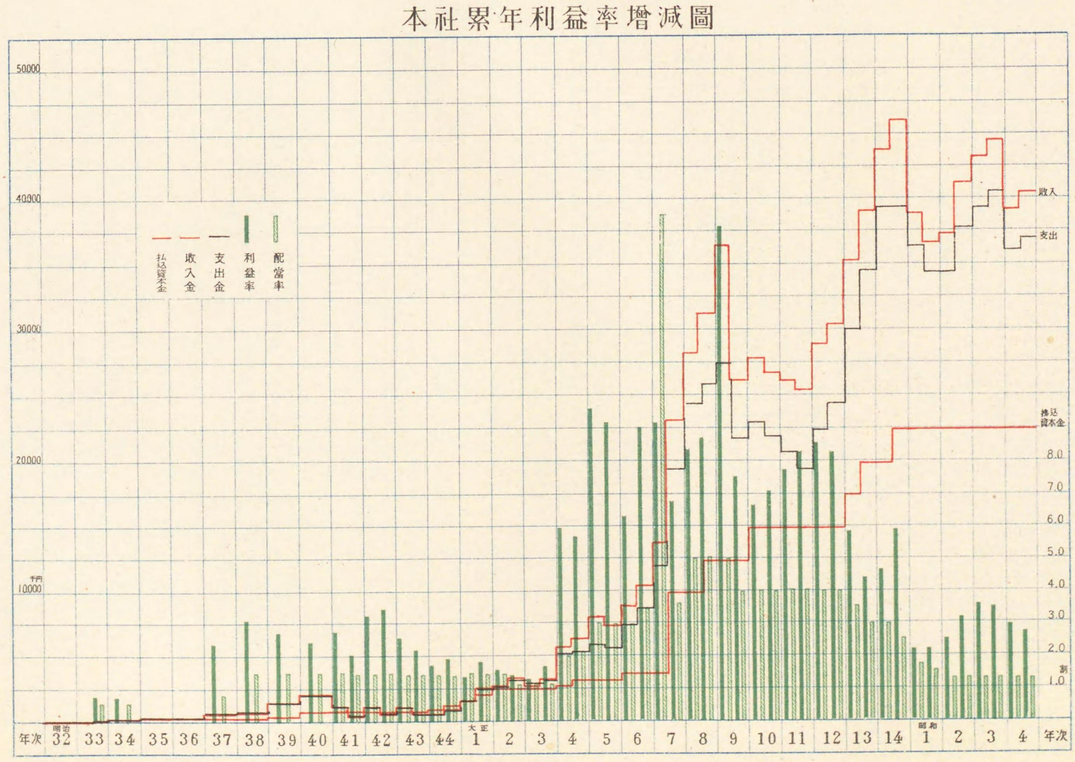
但シ大正元年マデハ販賣價額



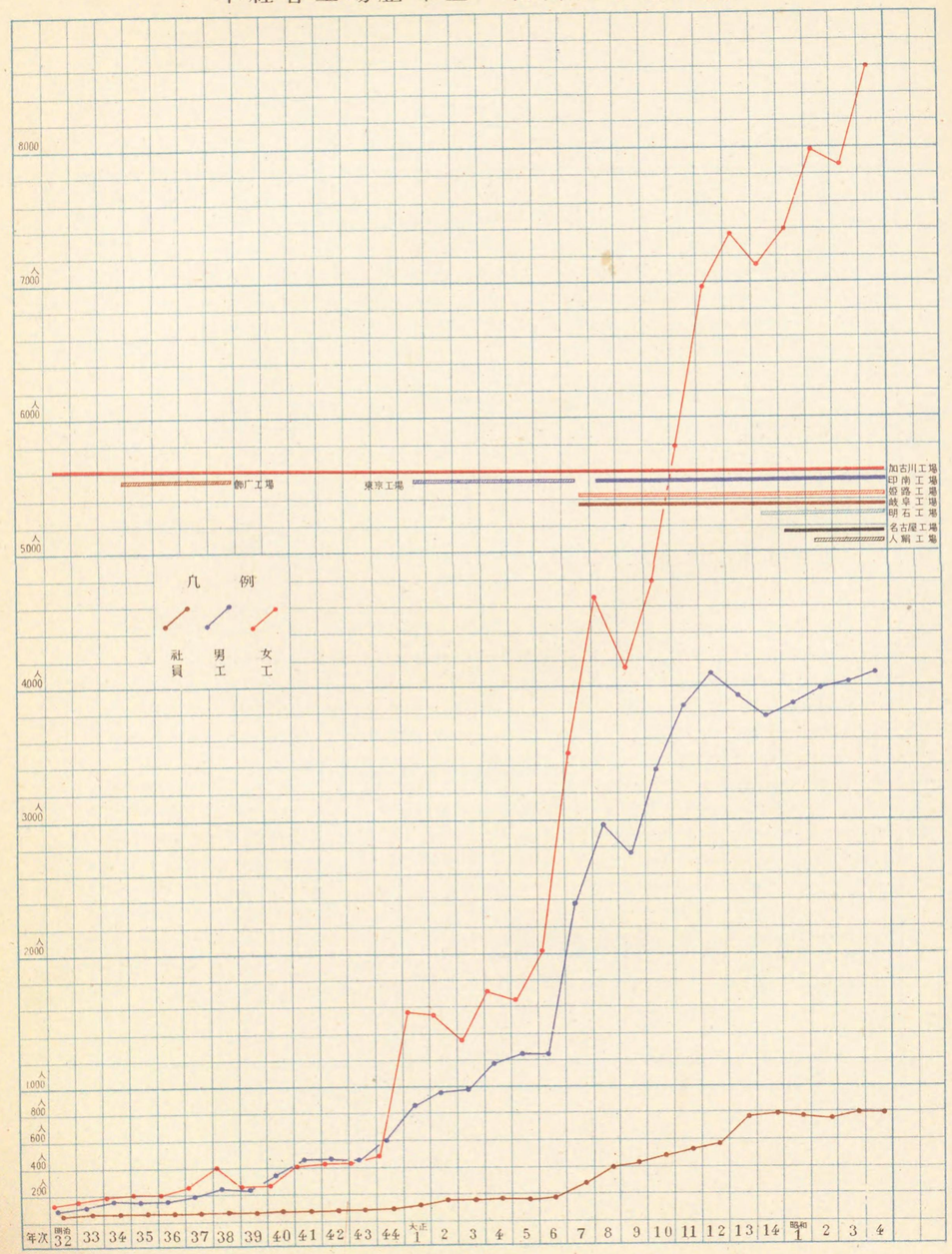
本社製品內地、滿、鮮、灣販賣領域圖



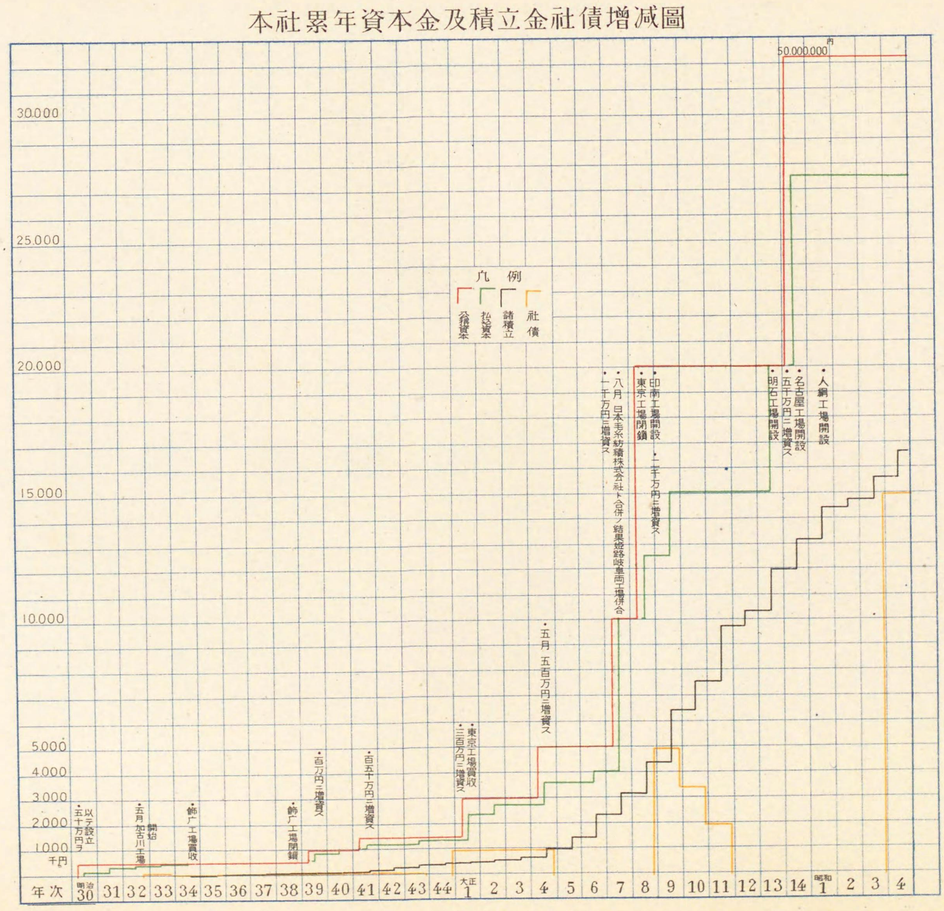
本社累年利益率増減圖


50000
40000
30000
20000
千円
10000
払込資本金
収入金
支出金
利益率
配當率
收入
支出
拂込資本金
8.0
7.0
6.0
5.0
4.0
3.0
2.0
1.0
割
年次
昭和32
33
34
35
36
37
38
39
40
41
42
43
44
大正1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
昭和1
2
3
4
年次

本社各工場歴年並ニ社員工手増減圖



本社累年資本金及積立金社債増減圖



第一編　沿革

第一章　緒言

我が日本毛織株式會社は、設立以來、本年を以て正に三十四年に相當し、此の間の沿革徑路は、本邦羊毛工業史の大半に亘りて、頗る重要なる頁を占むるのみならず、名實共に今や、本邦最大の毛織會社として、自他共にこれを許すに至つた。然し人生に於ける三十年は、未だ齡の半ばに過ぎぬ。少壯時代の修業漸く成つて、壯氣橫溢、將に大に爲す所あらんとする時である。當社もまた既往の徑路を省み、斯界の前途を想ふとき、此の感愈切なるものがあると共に、責任の一層重大なるを覺えざるを得ない。

顧ふに、本邦に毛織工業が起つたのは、明治十二年官設「千住製絨所」の創設されたのがその初めである。これを動機として、其の後二三の民間毛織會社が起つたが、當時國內の毛織物需給は、未だ極めて微々として振はず、其の需要は一部階級の使用に止まり、いはゞ一種の贅澤品視せられた感があつた。而も其の供給は、擧げて之を輸入品に仰ぎ、內地生產額の如きは、殆どいふに足らなかつたのである。然るに、日淸戰役を經、日露戰役の頃から、斯業は遽に發達し、更に歐洲大戰時代より、毛織物の需要は、あらゆる階級に亘つて普及し、國民日常の必需品化するに至つた。隨つて內地の斯業は一層急激なる發展

を遂げ、今や國内總消費年額三億圓、この中内地生産は二億二千萬圓の巨額に上り、一部は國外に輸出するの盛況に達し、まさに國家の基本工業として、重要なる地位を獲得するに至つた。これを當社の營業狀態に見るも、過去三十有餘年の間に、資本金は百倍に加增し、製品は三百倍に激增し、從事員數も亦百倍餘の增加を見るに至つた。これをしも事業界の驚異といはずして、果して何であらう。而も斯くの如きは、國運隆昌の然らしめたる所なりとはいへ、能く大方各位の同情と、絶大なる後援とがなかつたならば、決して此の盛運に會することは出來なかつたのである。此の機會に於て當社は、これら各位に對して滿腔の謝意を表するものである。

然しながら、當社既往の徑路は、決して坦々たるものではなかつた。卽ち、去る明治廿九年十二月、日淸戰後の好況期に際し、當社が、神戸兵庫の一角に、呱々の聲をあげた當時に於ては、我が羊毛工業界も、僅に千住製絨所、東京製絨會社の外、二三の小工場が存在せしに過ぎず、寔に寥々たるものであつた。而も技術は未だ幼稚、生產も亦極めて微々たるもので、國内の需要は、擧げてこれを輸入品の跋扈に委するの狀態であつた。當社創業の當初は、毛布を製造し、技の進むに隨つて、漸次羅紗を織り、モスリンに及び、次で輸入品を驅逐する抱負であつたが、何分にも未熟なる技術は、これを如何ともする能はず

造る品も、造る品も、舶來品に對抗することが出來ず、ために事業は困難、成績は不良、外は取引員の嘲りを受け、内は出資者の不滿を買ひ、具さに經營の苦惱を嘗めたのである茲に於て當社は、輸入品に劣らざる製品を造るには、先進國の技術を傳習するの外なきを知り、技術員を歐洲に派遣して、親しく英佛獨の製絨術を學ばしめた。これ實に、民間毛織會社に於ける技術員海外留學の嚆矢である。幸に此の擧は、得る所多く、次で起れる日露戰役に際して、我が軍需品自給の一端に資する處があつたのみならず、著しく製造技術を改善して、輸入品に對抗し得べき毛織物を製造し得るに至つたのである。

日露戰後の好況期に入りては、内地のモスリン工業頓に發達し、當社も亦此の事業を開始するに至つたが、當時斯業は、其の半製原料たるトップに就き氣候風土の關係上、本邦に於てはこれが製造を不可能となし、各モスリン工場は主として英濠のトップを輸入し、これを紡織する工程を採り、トップの製造より生ずるノキル其の他の副產物は、擧げて之を外國工場の收利に委するの狀態であつた。當社は此の不利を忍ぶに堪へず、技術員を歐洲に派遣し、親しく彼の地のトップ事業を視察せしめたる結果、此の事業の可能なるを知り、大陸式梳毛機を購入すると共に、數名の獨逸人技師を聘して、技術を傳習せしめ、本邦最初のトップ工場を開始したのである。此の擧は豫期の如く成功して、普く斯界にトッ

プ製造不能の蒙を啓くを得たのであつた。爾來内地の羊毛紡織會社は、當社の施設に倣ふて、トップ事業を起すもの相踵ぎ、以て斯業今日の基礎を築くに至つたのである。此の間當社は、更にトップ毛絲專業の姉妹會社を新設し、一層斯業の發展を圖る處があつたが、之は後日當社に合併して、資本設備の倍增を見るに至つた。當社はまた一面に於て、原毛の供給施設に意を注ぎ、内地牧羊を企圖すると共に、社員を濠洲に派して、羊毛原產地の實狀を調査せしめ、これにより原毛經營上資する處、實に尠からぬものがある。

更に歐洲大戰に際して、毛織物は勿論、原毛、染料及び機械材料の輸入杜絶し、内地の斯業は、一時甚しき不便を訴へ、之がため、中には絹綿紡織を兼營するものさへあつたが當社は常に豐富なる手持原毛を抱ける上に、トップの自給設備を存せしため、操業上さしたる支障を受けざりしのみならず、當時續々殺到せし、露國軍絨の大註文に對して、其の半ば以上の製造を引受け、以て聊か有事の際に於ける奉公の誠を致すを得たのである。大戰中は所謂内地斯業界の黄金時代であつて、市價は無限に昂騰し、既設會社の增資するもの、新設會社の創業するもの、陸續として相踵ぎ、斯界空前の盛況を呈したが、殊にモスリン、セル着尺物の流行は、手機業の勃興を促進し、愛知、岐阜、靜岡地方に於ける毛織小機業は、凄まじき勢を以て發展し、ために戰後に至り、原毛の需要頓に激增し、毛絲の

輸入せらるゝもの、戰前に比し數倍の數量に上るに至つた。茲に於て當社は、第三段の發展策を講じ、是等輸入毛絲を防遏する目的を以て、更に資本金を五千萬圓に增加して、既設毛絲工場を擴充すると共に、名古屋に毛絲工場を增設し、なほ人造絹絲界近來の趨勢に鑑みて、人絹工場をも併設し、聊か國產の奬勵に副はんことを期したのである。

歐洲大戰中、新設せられたる多數の毛織會社の中には、其の動機濫興にして、經營放漫なりしものがあつたので、戰後の財界反動期に入るや、忽ち經營難に陷り、減資、休業、破綻續出し、而も之に加ふるに、大正十二年關東地方を襲へる大震災は、有力なる紡毛毛織工場の大半を崩潰せしめて、未曾有の厄難を現出した。此の震災のために、損害を蒙つた同業者の中には、當時既に破綻の悲運に陷つたものもあつたが、其の後斯界の不況は容易に回復せず、事業の經營は愈々多難時代に入り、最近更に二大會社の破綻を見るに至つた。此の間當社は創立當初より信條とする、堅實主義を以て一貫し、不況に屈せず、好況に驕らず、一意國產のために、技術を磨き、組織を整へ、放漫なる經營は嚴に之を戒むると共に、餘剩は蓄積して、專ら基礎の堅實を圖つて來た。之がため事業は益々順調に進み資本と設備の大膨脹を告げて、今や關東關西に亘りて、直屬工場七ヶ所、傍系會社工場三ヶ所を算し、其の所產はあらゆる羊毛製品に及び、これに使用する原毛は、本邦輸入額の

約六割を占むるの盛況に達した。

斯く述べ來れば、當社の抱負は既に達成せる觀あれども、使命は永く、寧ろ今後に於て重且つ大なるものがある。蓋し、我が羊毛工業史の大局よりすれば、本社既往の沿革徑路は、いはゞ一個の創業史であつて、過去三十年續け來れる努力は、更に今後に備へんとする基礎工事の如きものである。

試みに、これを內地毛織物消費の趨勢に觀るも、當社開業當時の明治三十二年に於ける羅紗セルヂスの內地消費量は、約三百二十萬碼に過ぎなかつた。然るに、それから三十年後の昭和元年度に於ては三千八百五十萬碼、卽ち約十二倍の增進を示してゐる。假りに、將來の內地消費の趨勢が、この增加率を以つて進むものとすれば、三十年後に於ける、羅紗、セルヂスの內地消費量は、無慮四億六千萬碼の巨額に上るべき勘定となる。更に、これを最近世界各國の人口別羊毛消費量に見るも、我が一人一ヶ年の羊毛消費量〇·八五封度なるに對して、白佛は其の十四五倍、英は十一倍、米獨は七八倍、伊西は五六倍の多量を示して居る。從つて我が國民の生活樣式が、普く洋風化する時代に至らば、羊毛消費量もまた歐米のそれに到達するものと見なければならぬ。況んや、服裝樣式の洋風化せる現實に當面しつゝあるに於ておやである。而も隣國には支那印度の如き、輸出貿易の大市場を

擁して居るのである。實に、我が羊毛工業の前途は、無限の大洋の如きものがある。當社の使命は益々重大、その責務は愈々輕からずと謂はなければならぬ。

當社既往の徑路は、上述し來たつた所により て、過去三十餘年間に於て、當社が此の使命の下に、如何に努力を續けて來たか、はたまた現在の施設や、將來の抱負如何に至つては、別に詳細なる記錄の具狀に俟たなければならぬ。惟ふに、我が國の事業界は、明治の維新より、日清戰時に至る搖籃期を經て、日清戰後の第一次發展期に入り、更に日露戰時より、戰後に亘りて第二次發展期を劃し、歐洲大戰に至りて、常軌を逸せる好況時代を迎へ、戰後の整理期を經て、現時に至る五次的轉期を劃し、以て今日の發達を呈するに至つたものである。當社の沿革徑路も亦偶然にも、此の轉期を辿つて、發展を告げて居る。卽ち、日清戰時より、日露戰時に至る創業時代に於ては、羅紗毛布の技術的成功を以て一期を劃し、更に日露戰後より、歐洲大戰に至る時代に於ては、トップ事業の創業を以て一期を劃し、歐洲戰時の好況時代も亦各事業の大發展を以て一轉期を見せ、大體に於て四次的發展期を劃して、現狀に進んでゐる。而も此の間に於て、他同業者の事業は當社の事業を勵まし、當社の事業はまた、他の同業者を刺戟するなど、交互相援け、相競うて發達し、其の間關聯する處極めて深きものがある。以下

編を分ち、章を逐うて記述する所は、此の見地より當社の沿革と事業を記述したる後、更に當社の外史として、我が羊毛工業の小史を錄し、以て當社の地位と使命を、一層明確ならしめやうとするものである。

第二章　創業時代

日清戰後の我が經濟界は、清國から償金が收受せられたのと、戰勝の人氣とで空前の好況を呈し、事業熱が勃興して、各種の新事業が起つたが、我が羊毛工業界は、未だ黎明期ともいふべき時代であつて、需要の大部分は、殆ど之を輸入品に仰ぎ、內地の製造工場は僅に官設千住製絨所外二三に過ぎず、之が技術の熟練せざると、經營が困難であつたため計畫するものが極めて稀であつた。當社は此の間に於て、赤毛布を製造する目的を以て起ち、漸次羅紗の製造を試みるに至つたが、原料機械買付の不便はいふまでもなく、幼稚な技術を以て、練達せる輸入品と對抗しやうとするものであるから、販賣の困難なる實に名狀し難きものがあり、具さに經營上の辛酸を嘗めたのである。

此の時代の十年は、當社にとり眞に生誕苦の時代であつて、動もすれば經營破綻の危機を孕んで居たのである。然るに、能く此の經營難を支へて、次期發展の基礎を築き得たのは、實に社長を始め從業員一同が、血の滲むやうな努力を續けた結果に外ならぬ。今にして當時を回顧すれば、萬感交々湧くの概がある。記述は僅に其の梗概に止めたけれども、此の一編の沿革記錄こそ、當社にとりては、最も思ひ出の多い創業史であらねばならぬ。

第一節　設立の由來

當社が神戸市の一角に、呱々の聲をあげたのは、明治二十九年の十二月である。當時我が財界は、日清戰爭によりて撒布せられた資金と、戰後清國より得たる償金によりて、戰勝の人氣が彌が上に沸騰し、空前の好景氣を現出してゐた。卽ち、新事業の計畫さるゝもの所在に起つたが、獨り羊毛工業は、事業の性質上、熟練の技師職工に乏しく、經營困難なるため、新規に計畫するものが、極めて稀れであつた。

其の頃現社長川西清兵衞氏は、神戸市兵庫川崎町なる先代清兵衞氏の許に於て、其の名も音松と稱し、石灰石油の問屋を營んで居た。普通の人なれば、傳統的の家業を墨守して居るのだが、元來進取の氣象に富み、時勢を觀るの明ある氏は、此の家業に執着するを好まず、新しい境地に其の手腕を伸ぶべく、當時の事業界を物色した末、毛織事業の將來あるを見越し、之により志を立てんことを期したのであつた。然るに、家業の暖簾を重んずる、其の頃の兵庫商人の保守的氣風は、容易に氏の希望を達すべくもなかつた。然し一旦思ひ立つたことは、中々に飜へさゞる氏の氣象とて、遂に先代を說きて其の許諾を得、同志を語らひて毛織會社を計畫するに至つたのである。當時氏と志を同うせし人々は、池田

貫兵衞（元取締役）、有馬市太郎（元相談役）、小曾根喜一郎（現相談役）、先代澤田清兵衞、松本善七、米光源之介氏等を初め、總て二十七名であつた。これ等の人々は、何れも神戸兵庫に於ける錚々たる實業家のみで、其の顏觸れを擧げると左の通りである。

川西音松（現清兵衞氏）	澤田清兵衞	小曾根喜一郎	澤田龜之助
松本善七	米澤吉次郎	岸本豐太郎	有馬市太郎
柏木庄兵衞	安藤行敬	石井源兵衞	志方勢七
米光源之介	藤本莊太郎	兒山司直	藤本安兵衞
木谷吉次郎	永見吉郎	中西市二	杉山利介
岡崎高厚	池田覺藏	松本愛次	喜多伊兵衞
鎌田覺藏	石川茂兵衞		
森本六兵衞			

上記の諸氏は、直に發起人として立ち、同廿九年五月、神戸市宇治川常盤に於て第一回の發起人會を開き、會社の計畫に就き、懇談熟議の末、發起人は各自百株以上を引受けること、發起人總體の引受株數は、總株數の六割以上たるべきこと、會社は日本毛織株式會社と稱すること等の申合せをなし、茲に初めて日本毛織株式會社の名稱が確定した。そして創立費豫算金三千圓を計上し、五名の創立委員を擧げて、會社發起認可申請、株式募集

敷地選定、技師雇入、諸機械買入等の創立事務一切を委托したのであつた。五名の創立委員といふのは、川西音松、有馬市太郎、松本善七、米光源之介、安藤行敬の五氏で、委員互選の結果、川西氏が創立委員長に推選せられ、創立事務を統轄することゝなつた。委員は直に其の筋に向つて會社發起認可の申請をなすと共に、假定款、目論見書、收支豫算書を編製したが、當時の設立目論見書は左の通りである。

日本毛織株式會社設立目論見書

一 當會社ハ株式會社ノ組織ニヨル

二 當會社ノ營業ハ各種ノ毛織物ヲ製造シ之ヲ販賣スルヲ以テ目的トス

三 當會社ハ日本毛織株式會社ト稱シ本店ヲ兵庫縣神戸市ニ置キ便宜ノ場所ニ支店若クハ出張所ヲ設置ス

四 當會社ノ資本總額ハ金五十萬圓ニシテ之ヲ一萬株ニ分チ一株ノ金額ヲ金五十圓トス

五 當會社資本金ノ使用概算ハ左ノ如シ

一金十三萬七千八百二十圓　諸機械費
一金五萬九千百八十圓　地所建物費
一金三千圓　創立諸經費
一金二十五萬圓　業務擴張豫備資金

六 發起人ノ引受クヘキ株數ハ六千百株トス

七 當會社ノ存立期間ハ設立免許ノ日ヨリ滿三十ケ年間トス
但シ株主總會ノ決議ニヨリ之ヲ延長スルコトヲ得

斯くて、同年六月二十日附を以て時の榎本農商務大臣より、會社設立認可の指令を受け創立事務所を兵庫宮内町に設け、川西創立委員長監督の下に諸般の創立事務を開始することゝなつた。次で同年十月までに、發起人持株と豫約募集株を決定し、總株數一萬株の中發起人引受株六千百株、豫約募集株二千六百六十株を控除せし殘株千貳百四十株を、一般の公募に附した處、意外の好成績を示して、五百二十七株の應募數超過を見るに至り、比例募入の方法によりて、募入數を決定したのであつた。

當時株式募集のために發表せし設立趣旨書は左の通りである。

日本毛織株式會社設立趣旨書

明治二十七八年戰役以來、我ガ國ノ風潮頓ニ變遷ヲ來タシ、百般ノ事業皆其ノ面目ヲ改メ、殊ニ鐵道紡績事業ノ如キ頗ル勃興ノ勢ヲ示シ、日ニ月ニ相競フテ以テ隆々一方ニ傾斜スル滔々タル百川ノ潰決スルガ如ク其ノ底止スル處ヲ知ルニ苦シム、實ニ盛況ナリト云フベシ。

然レドモ、畢竟是レ舊時ノ狀態ニ比較シテ然ルモノニシテ、之ヲ歐米ノ諸國ニ比照スレバ尙幼稚タル固ヨリ論ナキノミ。然リ而シテ、我ガ國目下經濟上必須ノ工業ニシテ尙未ダ發達セザルモノ枚擧ニ遑アラズ。實ニ慨歎スベキノ至リナラズヤ。

就中我ガ國毛織事業ノ如キハ經濟上頗ル必要ノ工業中ニアツテ甚シク發達セザルモノナリ。

蓋シ該事業タルヤ、未ダ我ガ國ニアツテハ漸ク東京ニ官立千住製絨所並ニ東京製絨株式會社、日本毛布製造株式會社外一ノ製造所アルノミ、大阪ニ大阪毛絲紡績株式會社及ビ大阪毛布製造株式會社アルノ外殆ド見ルベキモノナシ。

抑モ毛織物ノ需要ハ、經濟ノ進歩ト共ニ今後益々增加スベキハ自然ノ常理ニシテ、今爰ニ喋々スルヲ要セザルナリ。

然リ而シテ、叙上ノ如ク極メテ微々寥々タルハ何ゾヤ、コレ他ナシ、一ハ未ダ多ク經驗ナキ新事業ニ屬スルヲ以テ適當ノ職工ニ乏シキト、一ハ羊毛輸入稅賦課ノ爲メニ高價ノ原料ヲ購入シ製造スルモ或ハ輸入品ト充分拮抗シ能ハザルニヨレリ。然ルニ本年四月一日以後羊毛輸入稅ハ免除セラレタルハ、從是大ニ毛織事業ヲ起スベキノ機會ハ至レリ。唯經驗アル良職工ノ乏シキハ一ノ困難ヲ感ズルト雖モ、元來工藝ニ巧ニシテ手工ニ敏ナルハ本邦人獨特ノ長所ナルヲ以テ、適當ノ技術家ヲ聘シ、懇篤指揮誘導シ、漸次習熟セシメバ肯テ至難ノ業務ニアラズト信ズ。

殊ニ輦近販路ノ廣大ナル實ニ驚クニ堪ヘタリ。明治二十七、八年征淸ノ爲メ毛布幷ニ（フランネル）ノ如キハ非常ノ需用ヲ要シタリ、個ハ元ヨリ例外ナルモ、爾來今日ニ至ル迄夥多ノ輸入品アルハ稅關統計表ニヨリ、之ヲ證スルニ足レリ。

要スルニ、我ガ國ニ於テ目今製造品ノ少額ナルヲ以テ充分供給シ得ラレザルニヨリ、勢ヒ夥多ノ輸入ヲ仰ギツヽアル所以ナラン。豈國家百年ノ理財ヲ度ルモノ、深ク考慮セザルベカラズ。余等大ニ鑑ミル處アリ、爰ニ同志ヲ求メ、日本毛織株式會社ヲ組織シ、幾分ノ輸入品ヲ防遏シ國家ニ對スル本分ヲ盡サントス欲ス。請フ江湖諸君此ノ微衷ヲ深ク洞酌シ、幸ニ翼贊セラレン事ヲ。

明治二十九年十月

發起人　川西音松外廿六名

次で同年十月廿五日、會社創立の獻立があらかた調つたので、兵庫常盤花壇に於て、會社創立の總會を開いた。席上川西音松氏を座長に推し、創立費承認、定款作成、重役報酬等の件を附議決定し、取締役及監査役の選擧の結果、取締役として川西音松、松本善七、米澤吉次郎、米光源之介、有馬市太郎、安藤行敬、柏木庄兵衞、監査役として小曾根喜一郎、澤田淸兵衞、池田貫兵衞の諸氏當選、何れも其の承認を得たのであつた。會社は越えて同年十一月其の筋に向つて役員の認可申請をなし、翌十二月三日附を以て、農商務大臣より認可の指令を得、茲に初めて會社の成立を見たのである。

當時川西音松氏は、年齡少壯であつたが、此の計畫の主唱者であるのみならず、財的信望また厚く、且つ新進にして其の堅實なる手腕は、衆望の歸する所となり、會社最初の事務取締役に推薦せられ、次で社長に就任し、當社全般の事務を見ることになつた。此の時氏は早くも毛織事業を以て畢生の事業となし、不撓の精神を以て當らんことを、深く心に決したのであつた。宜なる哉、爾來三十有餘年、氏は一貫して社長の要職にあつて、經營一日も怠らず、遂に當社今日の地位を築き上げたのである。今でこそ日本毛織會社といへ

ば、誰知らぬものもないが、近年までは日本毛織と呼ぶよりも、川西さんの毛織會社といつた方が、よく通つて居たほど、氏の社長振りは徹底し、會社の川西化は、由來する所が深いのである。

工場敷地の選定は、創立委員の最も意を用ひた所である。初め委員は尼ヶ崎、西ノ宮、高砂、明石の各地に其の候補地を選び、運輸交通の便否、水質水量の適否など、仔細に調査する所あり、結局明石町茶園場（現明石工場敷地）の地所を適當と認め、東京の服部長七氏に托して、堀拔井戸を試鑿して、水質水量を精査し、其の頃恰も神戸に出張中の、千住製絨所大竹技師に請うて、實地の檢分を托したるに、業務上支障なしとの檢定を得たので、遂に意を決して同敷地を買收し、工場の建設に着手することゝなつた。然るに、此の時同敷地に近接せる明石城趾が、宮内省の御用邸候補地に選定せられたる結果、風致の保存上、附近に工場を建設することは、差控へねばならぬこととなり、遽に工事を中止して工場を他に移轉するの餘儀なきに至つた。會社設立の當初、かうした問題に當面した當社は、精神的にも物質的にも、隨分深刻な打撃であつた事はいふ迄もない。此の問題の解決のために開いた同三十年十二月の臨時株主總會は、果然種々なる物議を生じて、解散を唱ふるものさへあり、重役の苦衷一方ならぬものがあつたが、幸に當局に於ても、當社の苦

衷を諒とせられ、其の後宮内省より移轉費補助として金五萬圓を御下賜あらせられた。當時、當社に於ては、川西社長を始め各重役とも、此の恩命に恐懼して、一層國産の發達に努力し、以て皇恩の萬分の一に報ひ奉らんことを所期したのであつた。

工場敷地に次で、創立當時意を用ひたる點は、技師の招聘と、職工の養成とであつた。會社創立の初め、川西創立委員長は、技術上の問題に就ては、高松工學博士に相談し、萬事其の指導を受ける所があつたが、同氏は當社の技術顧問として平賀工學博士を紹介し、平賀氏の斡旋により、當時東京製絨會社の技師であつた小菅久德氏を、當社の技師長として招聘することゝなつた。そして一方、當社で採用した數名の工手を、大阪毛絲紡績會社其の他に托して、技術の練習をなさしめ、尚ほ機械と原料は、イリス商會、ラベス商會及び磯野商會等の手を經て、購入したのであつた。此の間、當社の事務所は、創立事務所の家屋を襲用して居たが、手狹であつたので、同三十一年の初め頃、新に兵庫戸場町四番屋敷を借入れて移轉し、始めて茲に當社の新標札を掲げて、設立の第一歩を踏み出すに至つたのである。

第二節　創業期の苦難

明石の工場建設計畫に支障を來たした當社は、更に第二の工場を、中播地方に物色し、加古川町に於て恰好の土地を得た。これが現在の加古川工場敷地である。地は一面山陽鐵道線に沿うて、運輸交通の便を極め、他面加古川の清流に臨みて、水質水量共に一點の申分もない。役員は一議にも及ばず、此處に工場を建設することに決定し、用地の買收を了るや、直に工事に着手した。時は、同三十一年の夏である。同年中に土工と建築の大半を終り、機械を据へ付けて試運轉を行ひ、百五十名の男女工手を傭ひ入れて、愈々作業を開始することゝなつたのが、翌三十二年の風薫る五月の半であつた。

初め當社の作業目的は、當時流行を極めし赤毛布を製造し、漸く技術の進むに隨ひ、羅紗やセルヂスを製織して、輸入品を防遏しやうといふのであつた。ところが、何分にも、毛織物といへば、技術の困難なるは勿論、之を販賣するに就ても、數千年來洗練されて、發達し來たつた歐洲先進國の製品と、競爭しやうといふのであるから、創業當時の經營の困難は、蓋し、想像の外である。

其の頃本邦に輸入せられて居た赤毛布は、英、獨の製品が主で、中でも市場に最も聲價の高かつたのは、馬々印と、ベアーの二種であつた。當社の製品は、初め此の馬々印の赤毛布を摸倣して製造したのであつたが、技術は未だ熟せず、原料は統一を缺ぎ、從つて製

品の不揃ひといふことが、大なる缺點であつた。そして輸入品は、反毛といふ經濟的原料を混織し得るに反し、我には反毛を得るの途がなく、原料は悉く純粹の支那羊毛を使用するのである。隨つて其の實質に於ては、當社の製品は輸入品に優つて居るが、仕上つた製品を比較すると、輸入品は手觸りが柔かく、色彩もまた鮮麗である、技術上の苦心もこゝにあつたが、販賣上の苦心はまた一方ならぬものがあつた。川西社長自ら販賣の陣頭に立つて、見本を携へて大阪の問屋を歷訪して歩くといふやうな狀態で、具さに經營上の辛酸を嘗めたのである。

當社の毛布が、漸く大阪の問屋に認められ、製造しただけ取引が行はれるやうになつたのは、開業の年の冬期頃からの事で、而も其の取引價格は、輸入品に比して一ポンドにつき、常に三四錢方格安であつた。これが爲に生產費は償はず、缺損續きであつたが、翌三十三年の春に至り、東京に出張員を派して、關東方面に販路を開拓することとした。此の計畫は當社製品を官納する動機となつて、同年の秋、陸軍より軍隊毛布の納入を命せらるゝに至つた。しかし技術と原料に就て、尙吟味すべき點があり、陸軍よりも之が爲め、數次警告を受けたので、製品の改善に就て、大に努力する所あつたが、原毛の精撰に就ては支那に出張して直接彼地の原毛を買付けるの外なきを知り、翌三十四年より社員を天津に

出張せしめ、支那羊毛の買付に從事せしむることとした。斯くの如く、着々販路の擴張と製品の改善に努めた結果、開業二年後には早くも、輸入品に劣らざる毛布を製造し得る程度に到達し、第一段の目的を達し得たのであつた。そこで、當社は、更に第二段の事業進出に移り、同年の冬より、羅紗織機を設備して、羅紗の製造を開始するに至つたのである

當社の羅紗が、弗々ながら陸軍納入の端緒に就いたのは、翌三十五年の年初であつて、此の羅紗の製造販賣に就ても亦、經營者や技術者の間に、血の滲むやうな努力が拂はれて居る。蓋し、當時本邦に於て、羅紗を製造する工場としては、僅に官設千住製絨所、東京製絨會社の王子工場、外一二に過ぎず、內地需要の大部分は、擧げて之を輸入に仰ぎ、其の製絨技術の如きも、未だ極めて幼稚なものであつた。そして、一方原毛の買付けに、幾多の不便があるのみならず、經濟的原料たるノキルや、反毛を得る途がなく、經營者の立場としては、實に容易ならぬ事業であつたのである。而も、此の不便と不利を凌いで、造り上げた羅紗は、生產費の點に於て、殆ど輸入品の敵ではなく、市場に於ても輸入品と競爭すべき見込が立たなかつたので、當社は專ら其の製品を、軍隊や諸官廳に納入する目的を以て劃策する所があつた。當時全國諸官廳の納入羅紗は、大約二十萬碼位のものであつたので、少くとも其の半數は、當社の手に占めやうといふ意氣込みであつたが、幸ひに事

業は此の方寸通り運んで、陸軍の第一回納入に次で、各府縣の註文を受ける事となり、三十四年末より、三十五年春に亙る恐慌時に際して、毛織物市價は崩落し、洋反物問屋の破綻頻出を見るに至つたが、官廳納入の方針を採つて居た當社は、さしたる影響を蒙らず、此の恐慌の埒外に逃るゝことを得たのであつた。

其の後、當社は一層經營に努力し、技術上の研究を怠らなかつた結果、製品の評判も漸く良好となるに至つたが、品質外觀は未だ輸入優秀品に及ばず、殊に原料の買付け、原毛の調合法、織物の染色、仕上法等に、幾多の缺點があつて、生產費は機械職工の能率關係も加はり、製造上の收益を擧ぐる程度に達しなかつた。ために、毎期の營業成績は、缺損又は無配當の連續で、明治三十七年の日露開戰まで、株主配當といつては、漸く五朱の配當を二期行つたのみである。されば、此の間、株主の苦情は頻出し、他の會社に合併、被買收等の風說も行はれたが、川西社長は斷乎として、是等の異說を排し、他重役の翼贊を得て、飽くまでも社業を續けて、一層斯業に努力精進するの覺悟を示したのである。そこで、如何にすれば、輸入優秀品に劣らざる製品を、製出し得るかといふことを、經營上の先決問題として研究し、遂に技術員を歐洲の先進國に派遣して、親しく彼地の製絨法を傳習せしめることとなつた。これが當社製絨術の劃期的發達を告ぐる動機となつたのである

時に明治三十五年の櫻花綻ぶ、四月の初めであつた。

第三節　技術員を歐洲に派遣

現今にては、社員の歐米留學といふやうなことは、殆ど月並の會社事業で敢て珍しくもないが、三十年の昔に、地方の一小毛織會社が、他の先輩會社に率先して、技術員を歐洲に派遣留學せしむるといふことは、斯界の驚異に値すべき、一大勇斷であつたのである。

技術員の歐米派遣は、前述の如く、如何にすれば輸入優良品に劣らぬものを、製出し得るかの問題を解決する、重大使命を帶びるものであつて、此の選に當つたのが、當時機械部技師であつた現取締役谷江長氏である。氏は明治三十五年四月、川西社長の附托を負うて歐洲に渡航し、先づ獨逸の毛織工場に入りて、製絨技術を實習し、それより佛、英の兩國を視察して、毛織技術や其の經營法を研究した。恰も此の時本邦では、露國と國交斷絶し、國を擧げての大戰爭となつたので、軍需品の大需要のために、內地の羊毛工業界は、遽に一陽來復の春が訪れることとなつた。

明治三十七年二月、日露の開戰となるや、內地の製絨界には、一時に大量の需要が起り當社の如きは、機械工場の全能力を擧げて、晝夜兼行製絨に從事するも、なほ其の需要を

充たすことが出來ぬので、翌三十八年に入つて、應急の施設として、播州飾磨の綿紡工場を買收して、工場能力の充實を圖ると共に、工手を六百餘名に增加して、軍需品の製造に全力を傾注し、聊か奉公の誠を致すを得た。而も、これがために當社は、開業以來始めての好成績を示し、三十七年には兩期とも一割、翌三十九年は兩期とも一割五分の株主配當を行ひ、聊か設立以來の辛勞を慰藉することを得たのであつた。

谷江技師の歸朝したのは、三十八年の六月であつたが、果して川西社長の考へ通り、從來の當社の製絨術は、幾多の改善すべき點があり、爾來、歐洲大陸の製絨法に基きて、機械設備の改良を行ひ、殊に其の原毛調合や、染色仕上法に力を注ぎ、新に軍絨の製出を試みる所あつたが、此の新絨地は、陸海軍當局の好評を博し、服地及び外套地の數點は、新に我が陸海軍絨の規格品に指定せらるゝなど、當社の製絨術は、こゝに劃期的の發達を遂ぐるに至つたのである。そして此の製絨法の改良と共に、新に購入せる歐大陸式梳毛機、及び精紡機によりて紡出せる原絲により、絨、サージ其の他の毛織物を製造し、市場に提供せるに評判特に宜しく、輸入優秀品に比して、何等遜色なしといふ折紙を附せらるゝに至り、設立當初の目的は、創業七年にして漸くこゝに達成し得たるのみならず、經營の基礎も亦漸く確定を見るに至つたのである。

第三章　日露戰後の發展時代

世界の强大國露國と戰つて、大捷した我が國は、戰勝の人氣と、戰後の財界好況で、至る所に新事業が勃興した。

我が羊毛工業が劃期的の發達を見るに至つたのも、實に此の戰後の好況時代であつた。殊に、モスリン工業の如きは、此の時代に入りて、全然輸入品を國外に驅逐する域に達したのである。

當社は創業十年の雌伏時代を經て、此の時代に入りて、漸く技術と經營上の基礎確立し製絨事業に向つて、一大飛躍を試みると共に、新にモスリン事業を開始し、更に他に率先して、梳毛事業を創設し、綜合生產組織より、基本生產組織に向つて進出し、次で今日の大發展を基礎づけるに至つたのである。故に、此の時代は當社にとつては、恰も修業中の學生が、卒業試驗にパスして、新に社會的に活動し出したときで、これを當社の歷史から觀れば、創業時代に次で思ひ出多い頁である。

第一節　製絨事業の發展

創業十年の試練によつて完成した、當社の製絨技術は、日露戰役後の好況時に入つてメキ〳〵と聲價を高め、陸海軍を始め、全國諸官廳の註文は愈々多く、在來の工場設備を以てしては、其の要求に應じ難きに至つた。そこで明治三十九年の春に五十萬圓、同四十年の冬に五十萬圓、都合二回の增資を行ふて百五十萬圓となし、加古川工場敷地を擴張して、第二工場を增設することゝなつた。そして此の間當社は、成績面白からざる飾磨工場を閉鎖して、工場の整理改革を行ふと共に、新施設に對する準備として、當時工場長であつた技師小菅久德氏を歐洲に派遣し、親しく彼の地の染色製絨の技術に就て、研究せしむる所があつた。氏は明治三十九年一月、歐洲に向つて發足し、專ら英、獨の製絨工場を視察し、同四十年十月歸朝したが、此の時建設中の加古川第二工場は、翌四十一年春に至り竣成を告げたので、小菅技師の齎らせる新式機械を据付けて、同年六月より各種絨類の製造を開始した。此の擴張によりて當社の製絨技術は一段の進境を告げ、工手數もまた八百三十名に加增して、製絨能力が倍增した結果、絨地製產額は一躍八十萬碼の年產に達し、本邦製絨界に於て嶄然群を拔くに至つた。

次で、當社は、此の豐富なる製絨能力を利用して、軍艦絨、メルトン及び優良なる膝掛類を試織して、輸入品に對抗し、大に市場の好評を博したが、同四十四年に入りては、更

に、天津出張所を通じて、清國方面に絨地の輸出を圖り、清國軍隊に多額の軍絨を供給した。本邦羊毛工業開始以來、海外に絨地を輸出したのは、恐らく之を以て其の嚆矢とするであらう。而も此の年は、前年來毛織物關稅引上げを見越して、多額の毛織物を輸入せるため、著しく市價の低落を來し、內地毛織物市場は、極めて不況に陷つたが、當社は諸官廳の註文輻湊せる上に、清國に革命亂突發し、此の方面の軍絨註文益々多く、ために製絨能力の不足を告ぐる程であつた。恰も好し、翌大正元年に至りて、當社と東京製絨所との間に買收談成立し、同年秋參拾萬圓を以て同製絨所大井工場を讓り受け、當社東京工場と命名して、直に絨地及びフランネルの製造を開始し、能力の不足を補ふ所があつた。

本邦製絨界に於ける當社の地位が、斯く重要を占むるに伴ひ、製品の聲價は愈々昂り、陸海軍及び諸官廳の納品は固より、市場の註文は年々增加を告げて、當社多年の宿望たる輸入品の防遏は、こゝに其の一端の目的を達するに至つた。之がため、營業成績もまた順調に進み、日露戰役終期の明治三十八年より、歐洲大戰直前まで、大正二三年の三期の一割二三步を除き、每期一割五步の株主配當を繼續し、日露戰前常に拂込以下に低迷し居た、當社の株式市價は、爾來親株最低五十五圓より、最高百二十圓の間を往來し、資本家の間に堅實好望なる放資株として迎へられ、斯業會社株式中のピカ一たるの觀があつた。

斯くして、創業時代十年に亙れる、當社の苦闘は、此の時代に入つて漸く酬ひらるゝに至つたのである。

第二節　梳毛事業の創設

本邦にモスリン工業が創設せられたのは、日清戰役の直後であつて、日露戰役に至つては、殆ど輸入モスリンを國外に驅逐するまでに發達して居た。然るに、是等のモスリン工場は未だ內地にトップ工業が發達せざりしため、其の原料は專ら輸入トップに仰ぎ、トップの製造により生ずるノキルの如き副產物の利益は、徒に外國工業家の手に委して顧みざるの狀態であつた。またセル其の他の梳毛織物原料も、輸入梳毛絲を使用するか、輸入トップによるかの二途を出でず、之がため蒙る國家經濟上の不利は固より、我が羊毛工業の獨立を阻害する所尠からぬものがあつたのである。而も當時トップ事業は、斯業者間に於て未だ充分研究熟せず、困難の事業として、何人も着手するものがなかつたのである。當社深く之を遺憾として、モスリン事業を計畫すると共に、他に率先してトップ、毛絲の自給を企圖し、明治四十三年春、再び谷江技師を歐洲に派遣し、親しく彼の地の梳毛工業を視察せしめた。其の結果、英國式梳毛製造法よりも、歐大陸式製造法が本邦に適するを知

り、歐大陸式梳毛機によりて、トップ、毛絲の製造を開始することゝなつたのである。

次で、同年秋に至り、技師小倉喜一氏を、獨逸に派遣して、專ら歐大陸の梳毛製造法を傳習せしめ、之と同時に、加古川工場敷地を擴張して、第三工場（モスリン梳毛工場）の建設に着手し、翌四十四年秋之が落成を告ぐるや、株主總會を開きて、資本金を三百萬圓に增加するの議を決した。越えて明治四十五年春、小倉技師は數名の獨逸人技師を率ひて歸朝し直にモスリン及び梳毛機械の据付けに着手、大正元年秋に至りて、機械全部の運轉を開始するに至り、厚物毛織事業に成功せる當社は、更にモスリン及びトップ事業に向つて、發展の第一歩を印することゝなつた。當時、本邦の毛織工場に於て、外人技師を聘すること、丸紅其の他の特約店をして試賣せしめたるに、品質極めて優るが如きは官設千住製絨所以來、稀有の事態として斯界の注目を惹いたものである。而も當社最初の製出モスリンは、良なりとて、市場の好評を博したのであつた。

其の頃、本邦のモスリン工場は、東京大阪兩モスリン會社の外に、上毛モスリン、東洋モスリンの大工場が駢立して製造を競へる結果、其の所產は一ヶ年五千萬碼に上り、生產漸く過剩の兆あり、滯貨は市場を抑壓して市況甚だしく振はず、各社は自發的に操業を短縮して、之が對策に腐心せる折柄であつたので、當社のモスリン事業は、創業匆々非常な

る經營難に陷つたが、幸にトップや、梳毛絲の自給的設備を有せしため、モスリン機は他の薄物製織に轉用し、專ら力を梳毛原絲の製造販賣に注ぎて、此の難關を乘り切るを得たのであつた。而も、此の經營法は、其の後偶ま大正三年の歐洲戰勃發に當りて、トップ毛絲の輸入杜絕により、市價空前の活況を呈するに至り、意外の好成績を擧ぐるの動機となつたのである。

第三節　日本毛糸紡績會社の設立

當社が加古川工場で、試みに着手したトップ事業は、果然好成績を示した。この勢ひをかりて、當社は更に一歩を進め、輸入トップを防遏する目的の下に、大規模のトップおよび毛絲工場の計畫に着手した。此の計畫は當社の大株主や、大阪の斯業者の贊同を得たので、當社の經營に累を及ぼさぬやうに、資本金二百五十萬圓を以て、日本毛糸紡績株式會社と稱する姉妹會社を設立することに決定し、當社株主の間に其の出資を募つたところ、株主は擧げて之に贊成し、應募株多數に上り忽ち滿株を告げた。そこで愈々大正二年二月會社創立の總會を開き、定款其の他の件を附議可決し、役員選擧の結果左記諸氏が當選就任することとなつた。

取締役社長　川西清兵衛　取締役　芝川榮助　同　小曾根貞松
同　澤野定七　同　谷江長
監査役　有馬市太郎　同　山口嘉造　同　石川茂兵衛
支配人　塚脇敬二郎　技師長　小倉喜一

斯くて會社は、地を姫路市に選びて工場を新設し、大正三年八月操業を開始するに至つた。これが後に當社と合併して、現在の姫路工場となつたのである。當時、此の會社の工場設備は、最新の樣式に則り、機械は全部歐大陸式を採用し、そして、其の据付けは主として獨逸人技師によつて行はれ、他に類例なき新式の工場として、世上に喧傳せられたものである。

會社開業の直後、恰も歐洲大戰勃發して、我が國は日英同盟の誼に基き、獨逸に對して宣戰を布告した。之がため會社招聘の獨逸人技師は、急に本國に召集せられるといふやうなことが起り、今少しく企業時機が遲延すれば、獨逸より機械の輸入も出來ず、また濠洲原毛の手當も出來なかつたのである。然るに、開戰の間際に工場設備や、手當萬端を完了して、危く戰時の支障より免れ得たことは、今より懷ふと、此の會社の創設は、全く天祐に惠まれて居たかの觀がある。そして、會社は開業後間もなく、原毛絲の輸入杜絶により

トップ、毛絲の市價稀有の活況を呈し、製品は極めて有利に捌けて、營業成績は、恰も順風に帆を孕ませたやうな勢ひで、トン〳〵拍子に、一割より、二割五分の好配當に進み、大正二年の二月には、資本金の倍額增資を行うて、上毛モスリン會社の岐阜工場を買收併合し、同七年五月に至りて、更に當日本毛織會社と對等の條件を以て合併するといふやうに、極めて都合よく運んで行つたのである。合併其の他の經緯は、更に後章に詳述する筈であるが、要するに此の會社は、當社の半身であつて、其の成否は當社の興廢に、非常なる影響を及ぼす所があつた。幸ひに會社計畫者が、設立の時機を誤らなかつたことは、當社との合併を早からしめ、以て當社今日の大を致さしむるの動機となつたのである。

第四節　毛織合同運動と當社

大正元年八月、我が羊毛工業界の一角に、突如として合同運動が起つた。

此の運動の動機に就て、當時世上に傳へられたる所に據れば、前年來羅紗の市況が振はなかつたので、各製絨會社は成績面白からず、之が轉回の方策として東京製絨、東京毛織物及び後藤毛織の三社合同して、陸軍々絨の製造所たる千住製絨所を拂下げ、軍絨事業を民間會社の手に移さうといふのであつた。當時の政府は、恰も政友會の支持せる西園寺内

閣で、財政の整理と民業發達のために、官業を民業に移すべしといふ説が盛に唱道せられた折柄であつたので、合同説の可能を傳へられたが、それには東京の三製絨會社のみではなく、關西製絨界の重鎭たる當社を、合同に加へなければ効果が乏しいといふので、工業協會より當社に對して、此の合同に加はるべく慫慂して來たのであつた。然し當時、當社の營業狀態は極めて順調であつて、三會社と同一に斷じ難き點あり、容易に此の勸説に應じ難き立場にあつた。卽ち、合同談の起れる翌大正二年六月、四社の資産狀態は左の如くであつた。

會社名	拂込資本	積立金	最近配當率
	圓	圓	割
東京毛織物會社	一、三〇〇、〇〇〇	一〇、〇〇〇	〇・八〇
東京製絨會社	一、三五〇、〇〇〇	一〇〇、〇〇〇	〇・九〇
後藤毛織會社	一、六五〇、〇〇〇	三七、〇〇〇	〇・八〇
日本毛織會社	二、六三、〇〇〇	六五三、〇〇〇	一・三〇

斯くの如く資産狀態に相違があつたので、當社は此の合同に加はるを欲せず、また陸軍當局に於ても、尙早を唱へて拂下げに反對を表したので、運動は効を奏せず、合同談もまた之に伴れて立ち消えの姿となつた。

然るに、其の後製絨界は、依然として振はず、經營愈〻困難となり、大正三年に至りて

合同談の再燃を見るに至つた。此の度は拂下げ問題と、合同問題とを切り放し、東京製絨會社及び東京毛織物會社の二社と、當會社を合同しやうといふのであつて、これがため工業協會は、澁澤榮一男（澁澤子）を煩はして、三社の間を斡旋する所あつたが、此の運動は其の合同條件に於て、東京側二社と、當社の意見折合はず、合同談は又復不調に了るの餘儀無きに至つた。蓋し、當時川西社長も東京に出張して交涉に與り、議は前回に比し、餘程具體的に進んでゐたが、東京側二社は、當社株一株に對し、二社株二株を以て、合同の基本條件としやうとし、當社側は當社株一株に對し二社株三株を唱へ、双方相讓らざりしため、交涉の成立を見るに至らなかつたのである。

越えて歐洲戰時の大正四年に至り、後藤毛織會社は鈴木商店の手に移つて、東洋毛織會社と改稱せられ、一層三社の合同的氣運が濃厚となつた。三社は合併の條件として、時の大隈內閣に向つて、三たび千住製絨所の拂下げを迫つた。當時世上に傳へられたる拂下げ條件なるものは、千住製絨所の固定資金二百萬圓、流通資金百萬圓合計三百萬圓を、無利息十ヶ年賦を以て償還拂下げを受けやうといふのであつた。然し、此の拂下げ運動は、陸軍側の反對のために成らず、結局、三社は拂下げ問題と、合同問題を切り放して談を進め大正七年に至り三社合併、東京毛織會社の設立を見るに至つたのである。

第四章　歐洲大戰時の好況時代

セルビヤの一青年の射つた一發の銃丸は、俄然歐洲の天地に大渦紋を捲起し、遂に全歐の大戰亂となつた。何しろ此の戰爭は、參加國ばかりが二十數ヶ國、大正三年八月から、同八年の六月まで足かけ六ヶ年に亙りて、歐洲全土を慘禍の巷と化せしめ、兩軍死傷二百萬、戰費總額三千億といふ千古未曾有の大戰であつた。隨つて、其の夥だしい軍需品のために、戰局外の國々は何れも非常なる經濟的好影響を受け、就中我が國は、東洋最大の軍需品供給國として、數十億の貿易出超を告げ、至る所財界事業界の大活躍を演じ、空前の黄金時代を現出した。

我が羊毛工業界は、原料機械の輸入難により、著しく生産を阻害したが、多額の軍絨輸出と、毛織物市價の大活況により、各社何れも非常なる好成績を示し、斯界開闢以來の盛況を呈した。此の好況時に際して當社は、熟達せる技術と、堅實なる經營法により、鋭意生産に努力したるのみならず、一面、日本毛糸紡績會社を併合したる結果、資本と設備は數倍の膨脹を告げた。

此の間年數としては、僅に六ヶ年に過ぎぬけれども、當社事業の發展的徑路より觀れば

此の時代の成績は寧ろ他時代の十年二十年にも勝りて、幾多の超記錄的事項を含み、極めて重要なる部分を占めて居るのである。

第一節　露國軍用絨の引受

歐洲大戰の勃發せし大正三年は、羅紗モスリンとも、前年來の不況の後を承けて、極度の不振に落ち込み、モスリン各社の如きは、ために操短五割といふ隨分思ひ切つた自衞策を斷行した程であつた。

其の頃當社は、前年來モスリン界の不況に鑑み、モスリンの製織を中止して、織機をセル、ネルに轉用すると共に、新設の梳毛機を利用して、トップ、毛絲の製造販賣を試み、羅紗は引續き官納品を主として製造する傍ら、內地市場の註文品を製織し、他面對支那輸出を圖りて、經營に力めた結果、當時市況が極度の不振であつたにも拘らず、能く一割二歩の株主配當をなし得たのであつた。同年八月歐洲大戰勃發するや、獨逸品の輸入杜絶して、染料、羅紗類の市況、遽に强調を呈せるのみならず、獨艦が南洋方面を橫行したので運賃保險料の暴騰となり、濠洲羊毛やトップの輸入が漸次困難となり、トップ、毛絲の市價昂騰して、內地の毛織物市場は、これを端緒として一齊に好轉を見るに至つた。當時既

に、トツプ、毛絲の自給設備を有せし當社は、これがために、一層有利な立場となり、益々經營上の强味を發揮して、加速度の進展を見るに至つたのである。

何しろ此の戰爭は、歐洲の天地を覆へすやうな大戰、參戰の諸國は莫大なる軍需品のために、一切の生產力を擧げてこれに費し、國外輸出の餘力なきは勿論、戰局外の諸國より船舶、物資の供給を受け、日もまた足らざるの狀態であつた。とりわけ聯合國に加擔せる我が國は、擔任最も重く、一面に於ては、青島の獨軍を封鎖殲滅して、東洋方面の禍累を一掃すると共に、一面に於ては聯合諸國の軍需品を引受けて、船舶、物資の供給に任じたので地理的關係の近接せる露國に對しては、最も多額の物資を供給し、中にも軍絨の供給は莫大なる額に上つたのである。

大正三年八月、第一回露國軍絨九十萬碼の註文到達するや、時の我が政府は、四大製絨會社を東京に集めて、それ〴〵勸說する所があつた。其の結果當社は、中四十五萬碼の製造を引受け、翌四年一月より製造に着手することとなつた。當社としては、かゝる大量の絨地を一時に引受けるのは、全く前例のないことであるので、之が準備に非常なる努力を費し、殊に當時輸入困難なりし機械の補充に對しては、血の滲むやうな苦心を拂つたものである。そして工手もまた增員を斷行し、前年の千八百五十名より一躍二千四百名に增加

し、更に資力を充實するために、同年五月臨時株主總會を開きて、資本金を五百萬圓に增加し、之に備ふる所があつた。

斯くて、第一回の露軍絨は、完全に引渡しを了したが、折返し露國より、第二回軍絨五百萬碼といふ、大量の註文が到來した。此の註文に對して、政府當局と毛織各社との協議の末、中二百五十萬碼だけ引受くることに決し、當社は更に此の中百三十萬碼を分擔製造することとなつた。當時、內地市場は、絨地拂底のため、空前の市價暴騰を演じてゐる折柄であつたので、露絨を製造するよりも、市場向きの絨地を製造する方が遙に有利であつた。然るに、當社がこれ等の利益を犧牲として、進んで大量の露軍絨を引受けて、晝夜兼行其の製造に努力したのは、聊か國家有事の際に於ける、奉公の念願にほかならなかつたのである。

露國軍絨は、其の後も引續き註文到來し、同年九月、第三回註文三百五十萬碼、同じ十二月には、第四回註文三百二十萬碼、更に翌五年の四月には、第五回註文五百萬碼と、殆ど息を繼ぐ遑もなかつた。當社は此の註文ある毎に、例によつて其の半を引受け、大正四年一月より翌五年四月の引受け分まで、露國に供給せし軍絨高は、合計七百六十六萬碼の巨額に達し、絕大なる製絨能力を發揮したのであつた。而も當社は、斯かる火急の註文に

對しても、製品は萬全を期して、粗製濫造を愼しみ、よく露國當局者の滿足を買ひ得たることは、顧みて自ら快しとするものである。

左に當時、當社と他社の露軍絨分擔製造高を表示して見やう。

歐洲大戰時露軍絨當社他社分擔製造高

引受年月	引受總量	當社引受量	他四社引受量
	碼	碼	碼
大正四、一	九〇、〇〇〇、〇〇〇	四五、〇〇〇、〇〇〇	四五、〇〇〇、〇〇〇
同　六	二、五〇〇、〇〇〇	一、三〇〇、〇〇〇	一、二〇〇、〇〇〇
同　九	三、五〇〇、〇〇〇	一、八〇〇、〇〇〇	一、七〇〇、〇〇〇
同　一二	三、一〇〇、〇〇〇	一、六〇〇、〇〇〇	一、五〇〇、〇〇〇
同五、四	五、〇〇〇、〇〇〇	二、五〇〇、〇〇〇	二、五〇〇、〇〇〇

露軍絨の註文は、其の後露國に革命が起り、聯合國を脫退するに至つたので、前表大正五年の註文絨を最後として、全く杜絶して了つた。爾來當社は、其の絕大なる製絨能力を利用して、內地各官廳の納入絨地や、市場向き絨地の大量生產を開始して、賣約に應じて行つたが、當時、輸入は殆ど杜絕し、毛織物市場は國產品の獨り舞臺であつたので、市價は活況に次ぐに活況を以てし、製品は飛ぶやうに賣れて、戰亂の終局後に至るも、尙好況を續けたのであつた。

第二節　モスリン、毛絲の好況

絨地は歐洲大戰と共に、好況に轉じたが、軍需品として其の用途の乏しきモスリンは、歐洲大戰の初頭尙一ヶ年は、引續き不振の裡に經過して、大正四年の下半期に至り、戰時財界好況の餘映を受け、漸く好轉するに至つた。これより先、全國のモスリン手機工場は原毛絲の輸入杜絕により殆ど全滅に瀕せる上に、五割操短を繼續せる各モスリン會社も原毛、トップの輸入難により、更に一段の苦境に陷つたのであつた。

然るに、英國政府は大正四年二月に至り、從來中立國のみに對して實施せる、雜種羊毛及びトップの輸出禁止を擴張して、本邦に對しても亦禁輸令を發するに至つた。蓋し、英國政府は、輸出せる羊毛が轉々として、敵國の手に移るを防ぐためである。此の禁令は我が毛織事業界に異常なる衝動を與へ、とりわけモスリンは、其の生產減を見越して四年四月遽に市況の活躍を演出し、稀有の高値を示現した。幸ひに當社は、此の時既に豐富なる手持原毛を抱ける上に、トップ自給の設備があつたので、他に轉用せるモスリン機を直ちに復活して、手一杯織機を運轉し、意外なる利益を收むることを得たのであつた。そして玆に特記すべきことは當時、當社は、三井物產を通じて英國より、多額のモスリン註文を

受け、第一回註文十五萬磅のモスリンを輸出した事である。歐洲先進國に對して、我がモスリンを輸出したのは、全くこれが其の嚆矢であつた。これより引續き當社のモスリンは英佛に輸出したが、製品は彼の地に於て一般に歡迎せられ、我が斯業界のために、至大の榮譽を博したのであつた。

越えて大正五年に至り、濠洲羊毛及びトップの輸入愈々困難となり、モスリン事業の苦痛益〻甚だしくなつて來た。中には或は操業を極度に短縮し、或は織機を綿布や、富士絹の製織に轉用して、當面を糊塗したものもあつた。現に當社の岐阜工場の如きも、當時上毛モスリン會社の附屬工場であつたが、トップの輸入難を緩和するために、日本毛糸紡績會社に讓渡されたものである。而も斯くの如く生産は減じつゝあるにも拘らず、一方に於ては需要漸增のため、市價は騰貴の一方に走り、前年標準物一碼三十二三錢より三十七八錢に昂騰したモスリン相場は、四年に入りて一躍五十五六錢に突飛するに至つた。此の市況活躍に面した當社は、トップの生産能力を極度に發揮して、モスリン生産に全力を注ぎドシ〳〵賣約して行つたのである。次で同六年に入るや、戰時景氣は愈々熱化して、モスリンの需要一層の增加を告げ、市價は更に一碼七十錢の高値を出すに至つた。

大正七年は、媾和說の頻發で、一再ならずモスリン市價の大波瀾を演じたが、同年末の

休戰條約成立によりて、稍行悶への狀勢となつた。翌八年春には、又復斯界は活況に轉じ同九年春にかけて非常なる活躍を演じた。卽ち、當時の市價を以て其の一班を示せば、八年春、標準物一碼八十五六錢であつたモスリン市價は、同年の夏季に入つて、一躍一圓十三錢となり、更に其の年末より翌九年の春にかけては、實に一碼一圓六十七錢といふ、空前の高値を示現したのであつた。しかし此の高値は久しく保たず、同年三月の財界反動期に至りて崩落し、漸次低落の步調に轉ずるに至つたが、とにかく、此の當時のモスリン市價は、破天荒の黃金相場である。此の間に處して當社は、大正七年には日本毛糸紡績株式會社を合併して、新に姬路、岐阜の兩工場を加へ、其の優越せるトップ、毛絲及びモスリン生產力を發揮して、大に斯界に活躍したのであつた。當時、當社のモスリン生產力が、斯界に於て如何なる地位にあつたか、乞ふ左表を見よ。

歐洲大戰時代當社全國モスリン生產高對照表

年次	全國モスリン生產高（千碼）	當社モスリン生產高（千碼）	全國對當社生產高比率
大正二	六九、五〇	四、四二六	六・八
同　三	五〇、三四六	一、二五四	二・五
同　四	六〇、〇八四	六、〇六三	一〇・三
同　五	四二、五四八	六、七〇三	一六・〇

同六	四五、八三	五、一七九	一三・七
同七	四五、八三〇	四、五六九	一一・七
同八	四一、五六三	八、〇〇一	一九・二
同九	三三、二六四	九、四一八	一七・六

備考　本表は農商務統計と東洋經濟新報社調査による

第三節　原料、機械の輸入難

歐洲大戰の初め、先づ我が羊毛工業界を苦しめたものは獨逸染料の輸入杜絶であつた。何しろ獨逸は、當時世界に於ける唯一の化學染料國で、殊に比較的高級の染料を使用する毛織染色は、殆ど獨逸染料に限られてゐた。然るに、此の獨逸染料が、聯合國の封鎖のために、遽に輸入杜絶となつたので、忽ち內地の染料市價は、暴騰に次ぐに暴騰を以てし、ダイヤモンド・ブラックは一時百斤に付四五百圓に上り、アリザリン・ブリユーは、百斤三四千圓といふが如き、狂騰を演じ、更に甚しきは、ローダミンの如き、一時百斤五萬圓といふ法外の市價を實現した。之がため大正五年の春、全國のモスリン友禪工場は、大部分休業するといふ騷ぎさへ起つた。此の染料儀礎は其の後米國染料の輸入となり、三井鑛山部の染料事業開始となつて幾分緩和せらるゝに至つたけれども、此の間毛織染色工場を惱ま

しめたことは、實に一通りではなかつたのである。現在の日本染料會社が、大正六年創設さるゝに至つたのも、この時代の染料儀礎狀態が、政府國民をして染料自給の必要を感せしめた結果に外ならぬ。當時、當社に於ては、露國軍用絨の製造に沒頭して、主として植物性染料を使用してゐたので、染料輸入難より受くる打擊は、案外輕微に了ることを得たのであつた。

染料輸入難に次で、襲來した原毛の儀礎は、我が羊毛工業界を通じて、極めて徹底的の打擊であつたのである。初め英、佛、獨の毛織物と共に、歐洲毛絲の輸入が杜絶して、全國のモスリン、セルの手機工場は、一齊に休機するの餘儀なきに至つたが、更に濠洲政府は、英國の封鎖政策を承けて、軍絨原料たる雜種羊毛、トップの輸出を禁止した。我が國は幸ひに同盟國の關係で、暫く禁輸の範圍外に置かれたが、大正四年の二月に至つて、我れに對してもまた輸出を禁じて來た。而も一面に於ては、船舶徵發と、獨艦橫行のために船腹は缺乏して、原毛トップの輸入は愈々困難を加へ、ために雜種羊毛は、市價戰前の二倍に暴騰し、メリノー羊毛もまた二三割方奔騰して、羊毛事業一般に、非常なる原料難に際會したのである。當時當社は、其の機を逸せず原毛の買付けをなし、比較的豐富なる原毛の供給を受くることを得たのは何よりであつた。